

2節 放送番組の制作

報道・スポーツ番組

I. 取材・制作・放送システム

1. ニュース取材・制作設備

16年度は、“ニュース一新”のキャッチフレーズで各番組キャスターが一新された。NW9のセットを全面リニューアルし、他の番組はマイナーチェンジを実施した。『ニュース シブ5時』『サタデースポーツ』はラウンドLEDディスプレーにCG制作したセット画像を表示させて、あたかも実際の空間が存在するかのように見せるハイブリッドセットを実用化した。セットの建て込み時間の短縮につながり、また、さまざまな背景CGを制作することで、より3次元的な奥行きのある演出が可能となった。

新N7セットは、女性メインキャスターとなり、視聴者に親しみが持てるセットを目標に、曲線を多用したセットデザインはそのままで、ネイビーブルーとピンクを基調にしたセットカラーに変更した。15年に整備した140インチ再撮プロジェクター2式を最大限活用するとともに、上手下手のセットの一部を家庭的なイメージを強調できるものに更新した。INDEXニュースについても、これまで黒・赤2色のみの表示に、青色を追加してニュースの多様化に貢献した。

BフロアのNW9、『ニュース シブ5時』では、ラウンドLEDや4K再撮モニターを使った演出を考慮してメインテーブルの位置を変更し、LED内部の映像でINDEXニュースができるように新規ソフト開発を実施した。

首都圏ネットでもCフロアにグリーンクロマキーセットを新規整備してフルバーチャル演出が可能となった。また、全中ニュースと同様に電子発注によるINDEXニュースを開始した。

各部署との連携・協力を綿密に図り、スケジュール管理を徹底して、通常の放送や緊急報道を維持しながら短期間で全番組セット更新を実現した。

百条委員会、日米首脳会談や首相会見などの際に、生マスコット番組対応が増えたため、新規整備した静止画バックアップマルチ系統をうまく流用し、質疑応答にも迅速に対応できるように既存設備と合わせた2系統システムを構築した。

本部ニュースセンターの映像サーバシステムの利用が定着した。ニュースセンターから送出するニュース・緊急報道・情報番組、ほぼすべての映像素材を本システムから送出した。また、映像交換システムの整備が完成し、北海道、東北、東海・北陸、中国、九州・沖縄地方の放送局との映像交換が可能となった。

本部ニュースセンターでは、7つの送出卓（電子台本運用卓：5台、マニュアルスイッチング卓：2台）を配置し、送出制御装置によりニュース項目単位で送出卓を切り替ながら送出している。

13年度からこれらの設備の老朽更新を進め、16年の年末にすべての設備更新が完了し、緊急報道を含めたニュース送出設備として運用している。

海外総支局の設備整備について、アジア総局の制作・伝送設備、中国総局の移転に伴う制作・伝送設備の更新を行い、信頼性に加え運用性の向上を図った。また、海外総支局取材カメラや編集機のファイルベース化更新では、PCベースのノンリニア編集機を、順次各総支局に配備した。同時にファイルベースの取材用カメラを導入し、ファイルベース化の基本を確立させた。さらに、衛星伝送設備であるBGANなど順次整備・拡充を進めた。これらの対応により、海外総支局における機材・設備の安定運用と国際情報の発信力を強化した。

2. 緊急報道設備

16年の12月に緊急卓オーディオファイルの更新が完了し『おはよう日本』深夜帯での地震訓練時に、ファイルの内容を確認し、実運用に向けての検証を重ねた。

3. 報道情報システム

報道情報システムは、ニュース原稿の作成から制作、送出までを担うNHKの報道を支える基幹システムである。多くのホストコンピューターとサーバー群を中心とした大規模なネットワークシステムである。

ニュースセンターのハイビジョンビデオサーバーシステムの地上放送（総合・Eテレ）でのニュース制作・送出の開始に合わせて、多数の報道情報端末にサーバー映像の試写とテロップの電子発注ができるアプリケーションを導入し、迅速かつ効率的なニュース制作が行える環境を整えた。

II. 緊急報道

16年度は、震度7を二度にわたり観測した一連

の「平成28年熊本地震」や、気象庁が統計を取り始めて以降で初めて東北地方太平洋側に上陸した「台風10号」など、大きな災害が相次いだ。

公共放送として国民の生命・財産を守る立場から被害の軽減や復旧に役立つ放送に総力を挙げて取り組んだ。特設ニュースやL字放送、データ放送など、さまざまな手段で情報を伝えた。さらに、関連ニュースのインターネットへの同時提供などを通じて、テレビを見られない状況の被災者にも情報を届けた。

ロボットカメラや、ヘリ中継、インターネット回線を使う「IP中継」などを活用し、現場の様子を迅速かつ機動的に伝えた。地域放送では、被災者に役立つ生活情報などを詳しく伝えることにも力を入れた。

6月には、スマートフォン向けアプリ「NHKニュース・防災」の運用を開始した。気象警報や地震の震度、津波情報を閲覧できるほか「高解像度降水ナウキャスト」を、通称「雨雲データマップ」として提供する。災害時には、アプリでも特設ニュースの「同時提供」を実施し、多くのユーザーに利用された。

1. 自然災害

(1) 平成28年熊本地震

4月14日午後9時26分、熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード6.5の「前震」が発生し、益城町で震度7を観測した。震度7は、11年3月11日の東日本大震災の発生時に観測されて以来。

4月16日午前1時25分には、マグニチュード7.3の「本震」が発生し、益城町と西原村で震度7を観測した。有明海と八代海の沿岸には津波注意報が発表された。

気象庁は一連の地震を「平成28年熊本地震」と名付けた。熊本県を北東-南西方向に横切る「日奈久断層帯」と「布田川断層帯」の活動によるものと考えられている。

熊本県と、隣接する大分県では、その後も活発な地震活動が続き、16年8月末までに震度6弱以上を7回（前震・本震を含む）、5弱以上を24回観測した。震度1以上の地震は16年4月末までに約3,000回、17年3月末までに約4,300回に達した。

地震発生からの1年間に、熊本県と大分県で、関連死を含め225人が亡くなった。住宅の被害は全壊と半壊、一部損壊を合わせ約20万棟で、最も多い時には850余りの避難所に約18万人が避難した。

NHKは、4月14日の「前震」発生直後から全

ての放送波で特設ニュースを放送し、相次ぐ地震や被害、救援活動の状況等を全国に伝えた。前震発生からの2週間で、総合テレビでは約130時間、ラジオ第1では約120時間の放送を行った。4月14日から18日朝までの5日間は、インターネットによるテレビ放送の同時配信を実施し、500万人を超える訪問者があった。地元熊本局では、被災者の暮らしに寄り添うライフルイン放送に力を入れた。ホームページやデータ放送、SNSなどを通じた情報発信も積極的に実施した。

一連の全国ニュースでは、スタジオを担当したアナウンサーが「まわりの人に声をかけながら避難してください」「小さな子供の手を握ってあげてください」など、被災地への積極的な呼びかけを行い、大きな反響があった。

(2) 福島県沖の地震で津波警報

11月22日、福島県沖を震源とするマグニチュード7.4の地震で、12年12月以来となる津波警報が、宮城県と福島県の沿岸に発表された。仙台港で1メートル40センチ、福島県相馬港で90センチの津波をそれぞれ観測した。福島県や茨城県、栃木県で震度5弱の揺れを観測した。

NHKは、地震発生直後から特設ニュースを放送し、アナウンサーが「東日本大震災を思い出してください。命を守るために、今すぐ逃げてください」と強い口調で呼びかけた。また、初めての対応として、画面の上部に平仮名で「すぐにげて！」という字幕を表示した。子どもだけがテレビを見ている状況でもすぐに避難してもらうため、大きな反響があった。

(3) 火山噴火

10月8日、熊本県の阿蘇山で爆発的な噴火が発生した。噴煙は高さ1万1,000メートルに達し、熊本県だけでなく、大分県や愛媛県、香川県でも降灰が確認された。

噴石で建物のガラスが割れるなどの被害が出たほか、送電設備に付着した火山灰が雨に濡れてショートし、熊本県と大分県で一時2万7,000戸が停電した。農作物にも被害が出た。

(4) 台風10号

8月30日午後6時前、大型で強い台風10号が岩手県大船渡市付近に上陸した。東北地方に南東から接近する異例の進路をとり、気象庁が統計を取り始めて以降で初めて、東北地方太平洋側に上陸した台風となった。

北日本の各地で記録的な雨が降り、岩手県久慈市や宮古市では1時間に80ミリの猛烈な雨を観測した。河川の氾濫が相次ぎ、総務省消防庁による

と増水した川に流されるなどして岩手県と北海道で合わせて27人が亡くなるか、行方不明になった。

岩手県岩泉町では小本川が氾濫し、浸水した高齢者グループホームで、入所者9人が亡くなった。町からは高齢者等に早めの避難を呼びかける「避難準備情報」が発表されていたが、情報の意味が正しく理解されず、避難は行われていなかった。

これを受けて国は12月、情報の名称を「避難準備情報」から「避難準備・高齢者等避難開始」に変更した。併せて「避難指示」を「避難指示（緊急）」に変更した。これに合わせNHKでも、放送等における表記等を変更した。

2. 映像取材体制

（1）航空取材

16年度は札幌・仙台（花巻空港で運用）・東京・新潟・静岡・名古屋・大阪・高松・広島・福岡・鹿児島・沖縄の12基地で15機のヘリコプターを運用し、災害などの緊急報道に対応した。4月の「熊本地震」では、福岡・鹿児島・大阪の計3機のヘリコプターで、甚大な被害の状況や熊本城の崩落など、特設ニュースでいち早く伝えた。

また、長距離飛行が可能な固定翼機については優先契約を継続した。3月、北朝鮮がミサイルを発射した際は、青森県西方沖350キロの日本海の洋上で、捜索活動の様子を撮影するなど、特性を生かした航空取材体制を構築した。

（2）IP中継・伝送体制

インターネット回線を利用して、映像伝送や生中継が可能なIP機器は、16年度にも追加の整備を進め、全国で合計600式以上に体制強化した。

4月の熊本地震では、16日の本震発生後11分で益城町の避難所の様子を生中継するなど、その日だけで54回の生中継を行った。また、8月の台風10号では37か所からのライブ映像を東京のニュースセンターで確認し、台風の動きに合わせて、風雨や被害の状況を伝えた。

（3）空撮映像・画像立体化システム

データジャーナリズムの一つである空撮映像の立体化システムにおいては、10月に噴火した阿蘇山をはじめ、噴火警戒レベルの高い全国の活火山の立体化に取り組んだほか、11月に起きた「JR博多駅前道路陥没」では事故直後の様子を素早く立体化し、スタジオ解説などに活用して、より分かりやすいニュース番組づくりに役立てた。また、熊本地震により被災した熊本城を従来のヘリコプター空撮だけでなく、ドローンを用いた低空撮影で、より詳細に立体化する新たな試みにも取り組

んだ。

（4）東日本大震災

震災6年目となる16年度も、東北3県への全国応援を継続した。その日数は年間およそ2,700人日で、発生からの6年間で延べ2万6,700人日を超えた。

III. 選挙システム

選挙システムは、ホストコンピューターと全国のサーバ・端末などをネットワークで結んで出口調査や最新の開票データなどを集計し、当選確実の判定や、番組・データ放送・インターネットなどの開票速報画面の作成などを行う設備である。

7月10日の第24回参議院議員選挙や7月31日の東京都知事選挙では、候補者情報を一元管理する候補者データベースで立候補者の情報を管理し、告示日の候補者紹介等に活用した。参議院議員選挙では鳥取・島根・徳島・高知の合区、選挙権年齢の18歳以上への引き下げなどの制度改正が実施されたことから、15年10月頃からシステムの改修に着手した。開票当日の総合テレビは『大河ドラマ』を前倒しして放送した後、参議院議員選挙では午後7時55分から、東京都知事選では午後7時59分30秒から開票速報を放送した。選挙システムと連動した速報画面のほか、バーチャルCGや大型タッチスクリーンを使用した動きのある演出により、開票状況を迅速かつ分かりやすく伝えた。特に東京都知事選挙では、16年度に整備された横長の大型LED再撮を活用して、きめ細かな開票速報番組を放送した。

11月9日の米大統領選挙の開票速報は、午前9時以降、毎正時から15~40分間にわたって放送した。大統領選挙向けのシステムは当確判定を行うためではなく、全米や各州での開票の集計と放送画面やインターネットの画面を生成するための設備であり、国内の選挙で使用するシステムとは全く別のものを開発した。前回（12年）は米ABCのホームページを基に州ごとの得票率や獲得選挙人数、勝利フラグを全て手入力していたが、今回

（16年）からはAP通信のデータを受信して自動集計することで迅速に開票速報画面を生成した。選挙システムの集計状況はニューススタジオのほかワシントン支局からも参照したほか、ラジオ第1や国際放送でも利用した。開票の結果、大方の予測に反してトランプ候補が勝利し、総合テレビの午後1時からの放送は終了予定の2時30分を大幅に延伸し、午後6時10分まで継続した。

IV. 國際回線ネットワーク

NHKでは、世界で起きた紛争や災害、国際情勢などに24時間体制で対応するため、海外総支局を結ぶ国際回線ネットワークを構築して運用している。

1. ネットワークの仕組み

ニューヨークのアメリカ総局、パリのヨーロッパ総局そして東京の放送センターは、光ファイバーと衛星を組み合わせた基幹回線（欧米日専用線、欧日専用線）で結ばれている。欧米の各支局は、それぞれの総局と回線で結ばれ、迅速かつ安定的な映像収集が可能である。

この基幹ネットワーク上には、映像ファイルを実時間より短い時間で高速転送したり、ファイル転送中に生中継が発生した際、自動的に両者を最適な速度に変更し同時並行で伝送を続行できる機能も搭載している。

ファイルで番組配信する海外の放送局も始めていることなどから、映像ファイルを自動的に基幹システムに取り込むシステムも構築している。このような最新技術は効率的なネットワーク運用を可能にするだけでなく、より迅速な緊急報道を可能にしている。

このほかアジア・アフリカ・中東地域の支局も東京まで迅速に映像を伝送できる回線を整えている。

2. 緊急報道と映像収集

海外の政情不安・テロ・災害等の緊急報道では、NHKの海外総支局や取材現場だけでなく、世界各地の放送機関や通信社などからの映像を迅速に入手することが重要となる。放送センターには、海外からの映像入手を専門に扱うチームが24時間体制で海外からの伝送路の確保と現場の記者やカメラマンを支援している。

NHKでは世界19の国と地域、24の放送機関から映像を受信しBS1の放送などで利用している。緊急時にはこれらの映像の利用に加え、現地の放送機関や通信社・映像プロダクションなどに直接連絡をして映像入手を行っている。

16年度は米大統領選挙関連、英国のEU離脱、欧州など各所でのテロ、シリア情勢、韓国の国政介入疑惑関連、カストロ前議長死去、北朝鮮関連など、さまざまな国際ニュース映像を扱った。リオ五輪・MLB・プレミアリーグ・テニスなどの多岐にわたるスポーツ中継にも対応した。16年度

に世界各地から届いた映像は3万6,485件、総伝送時間は、4万2,344時間となった。

3. 映像伝送から映像データ共有へ

通信のデジタル化が進み、映像素材の収集方法は大きな変革期を迎えている。送り手と受け手を線で結び映像を送る、これまでの「伝送」から、あらゆる所で自在に映像をアップロード・ダウンロードする「共有」に変わりつつある。技術の進歩により、衛星・光ファイバー・インターネット・携帯通信など多様な手法で国境を意識することなく映像を共有できる時代になった。

先端技術を効率的に運用するため、先端技術を常に把握し、映像をより迅速に安定的に収集（共有）するシステム設計・構築をコンスタントに行う業務体制が求められている。

一方、最新技術が十分に取り入れられていない地域は通信インフラが脆弱であるため、従来型の衛星伝送や、小型の衛星通信端末などを持ち込んで対応している。

全世界から自在に映像を入手するためには、従来型から最新技術まで幅広い知識とノウハウが不可欠になっている。また、NHK報道の信頼性向上には、極めて高度なサイバーセキュリティー対策が不可欠なため、強力に対応策を展開している。

4. 國際間の映像素材交換

NHKは、国際回線を使って内外のニュース映像を海外の放送機関にも提供している。

このうち「アジアビジョン（AVN）」は、ABU（アジア太平洋放送連合）傘下の30の国と地域、34の放送機関（17年4月現在）が参加している。15年度から衛星による素材交換をすべてインターネット経由に切り替え、毎日、素材ファイルを相互に交換している。ファイル交換にすることで回線時間に縛られない即時性の高い交換を実現した。

16年度に交換したニュースは1万7,175項目、このうちNHKは1,421項目のニュース映像をAVNに提供した。アジアビジョンに提供された映像は、ジュネーブのEBU（欧州放送連合）本部へもインターネットを経由したファイルで送られ、欧州域内の放送機関に連日配信されている。

V. ニュース

政治では、5月にG7サミット・主要7か国の首脳会議「伊勢志摩サミット」が三重県志摩市の賢島で開催され、世界経済を支えるため各国が財

政出動をはじめ政策を総動員していく姿勢を盛り込んだ首脳宣言を打ち出した。オバマ大統領が、現職のアメリカ大統領として初めて被爆地広島を訪問した。

6月、安倍首相が、17年4月に実施することになっていた消費税率の10%への引き上げを、19年10月まで再延期する方針を表明した。

7月、第24回参議院議員選挙の投開票が行われ、自民・公明両党が合わせて70議席を獲得、憲法改正に前向きな勢力は参議院全体の3分の2を占めることになった。また、この選挙では、選挙権年齢が「18歳以上」に引き下げられたほか、隣接する2つの県を1つの選挙区にする「合区」が初めて導入された。

8月、舛添知事の辞職に伴う東京都知事選挙が行われ、小池百合子氏が当選した。安倍首相が内閣改造と自民党の役員人事を行い、第3次安倍第2次改造内閣が発足した。天皇陛下が、国民に対して、退位の意向が強くじむ内容のビデオメッセージを表され、10月、政府の有識者会議が初会合を開き、天皇陛下の退位などの検討が始まった。

9月、民進党の代表選挙が行われ、蓮舫氏が、民主党時代を通じて女性として初めての代表に選ばれた。

11月、政府は、閣議で、南スーダンに派遣する自衛隊の部隊に、安全保障関連法に基づいて「駆け付け警護」の任務を新たに付与する実施計画を決定した。

12月、安倍首相とロシアのプーチン大統領が山口県と東京都で会談し、北方領土での共同経済活動の実施に向けて交渉を開始することなどで合意した。

17年2月、安倍首相がアメリカ・ワシントンでトランプ大統領と初めて首脳会談を行い、日米同盟の絆を強固にしていくことなどで一致した。

3月、政府は閣議で「共謀罪」の構成要件を改めて「テロ等準備罪」を新設する組織犯罪処罰法の改正案を決定した。

経済では、景気は緩やかな回復が続いたが、日経平均株価や円相場は海外要因で乱高下した。6月のイギリスの国民投票でEU・ヨーロッパ連合離脱派が勝利し、世界経済の先行きへの不安から株価が急落。円相場は2年7か月ぶりに1ドル=99円台まで円高が進んだ。一方、11月のアメリカ大統領選挙では大方の予想を覆して共和党のトランプ候補が勝利。景気拡大策への期待から、一転して円安株高の「トランプ相場」に突入した。

デフレ脱却を目指す日銀はマイナス金利政策を

含む大規模緩和を続けたが、大幅な金利低下で年金基金や保険会社が運用難に陥るなどの副作用が顕在化。この対応策として、日銀は9月、初めて長期金利にも誘導目標を設定する政策変更に踏み切った。

産業界では、三菱自動車工業が燃費不正の発覚で経営難に陥り、日産自動車の傘下に入った。東芝はアメリカの原子力事業で巨額の損失が判明して債務超過となり、再建のため主力の半導体事業の分社・売却などを迫られる厳しい事態となった。

自然災害では、4月に熊本地震が発生し、14日にM6.5で震度7を観測、その28時間後の16日には1回目の規模を上回るM7.3で再び震度7を観測し、大きな被害を出した。死者は熊本県と大分県で、関連死も含めて225人に上っている(17年4月現在)。震度7を2回観測するのは観測史上初めてで、2回目の規模が大きかったことから、気象庁は、本震の後に余震に注意という表現を地震発生直後には使わないよう見直した。

8月には岩手県大船渡市に台風10号が上陸した。台風が東北の太平洋側に上陸するのは統計を取り始めて以来初めてで、岩手県岩泉町では高齢者グループホームが濁流にのまれるなどして死者21人・行方不明者2人に上る大きな被害が出た。自治体が出す避難に関する情報を巡って、高齢者などの早めの避難を意味する避難準備情報が広く理解されておらず、内閣府が「避難準備情報」の名称を「避難準備・高齢者等避難開始」に変更することなど表現を見直した。

東日本大震災から6年となり、政府は震災からの復興期間を10年間とし、前半の5年を「集中復興期間」、後半の5年を「復興・創生期間」と定め、16年度は後半の1年目となった。高台造成工事や災害公営住宅の建設が進み、被災者の生活再建が本格化した一方、高齢化や二重ローン問題が課題となって、いまだ生活再建のめどが立たない人も多い。避難生活を続ける人は現在も12万3,000人余り、9万人余りが仮設住宅などで暮らしている(17年3月現在)。

また、東京電力福島第一原発の事故で、政府は、除染で放射線量が基準を下回り、生活環境が整ったとして、広い区域で一斉に「避難指示」を解除した。しかし、住民の放射線への不安は大きく、帰還の意思を示しているのは、高齢者が多いのが現実で、子育て世代が安心して暮らせるような環境づくりが喫緊の課題となっている。

一方で、経済産業省は、廃炉や事故の賠償などの費用の総額の見積もりを、従来の11兆円から倍

近い21兆円余りに膨らむと発表した。最長40年で廃炉を完了するという工程を含めて、引き続き検証が必要となっている。

海外では、ヨーロッパでイベント会場など、いわゆる「ソフトターゲット」を狙ったテロが相次いだほか、トルコでも空港やナイトクラブなどがテロの標的となった。

6月にはイギリスで行われたEU離脱の是非を問う国民投票で離脱派が勝利。フランスやイタリアなどでも反EUや反移民・難民を掲げる勢力が台頭し、EUの結束が問われた。

アメリカでは、自国第一主義を掲げるトランプ氏が大統領に就任。選挙戦から続く社会の分断は癒えることなく、その言動は、世界にも大きな波紋を投げかけた。

中東では、6年に及ぶシリアでの内戦終結のめどが立たず、イラクでは、政府軍が過激派組織IS・イスラミックステートのイラクでの最大の拠点モスルの制圧に乗り出ましたが、ISの完全な壊滅には至っていない。

中国は、南シナ海、東シナ海への海洋進出をさらに進め、影響力の強化を進めている。

北朝鮮は、9月にその年2度目の核実験を強行し、17年3月には4発の弾道ミサイルを同時に発射するなどミサイル発射も繰り返し、新たに誕生したトランプ政権との対立が深まり、緊張が高まっている。

スポーツでは、4月、盗作疑惑などで白紙撤回された20年東京五輪・パラリンピックの新しいエンブレムが決定、最終候補4作品の中から市松模様と藍色が特徴のデザインが選ばれた。

8月に行われたリオデジャネイロ五輪では、日本が金メダル12個を含む過去最多の41個のメダルを獲得、10代の若手も活躍し東京大会へ弾みをつけた。一方、9月のパラリンピックは、日本のメダル総数が24個と前回を上回ったが、64年東京大会から続いてきた夏の大会の金メダルはゼロに終わった。

大リーグでは、8月にイチロー選手が史上30人目の通算3,000本安打を達成、プロ野球では、9月に、広島が25年ぶり7回目のセ・リーグ優勝を果たした。

大相撲では、17年1月、日本出身力士としては19年ぶりに新横綱・稀勢の里が誕生した。稀勢の里は、直後に行われた3月の春場所13日目に左上腕部を痛めたものの強行出場し、千秋楽の優勝決定戦を制して、新横綱として22年ぶりの優勝を達成した。

1. 主なニュース番組

(1) 総合テレビ

毎正時のニュースのほかに早朝から深夜まで、視聴者の生活サイクルを踏まえ、それぞれの時間帯に即したニュース番組を放送した。

朝一番の『NHKニュース おはよう日本』や午前中の動きをまとめた『正午ニュース』、夕方には最新ニュースやネット上のトレンド、生活情報を伝える『ニュース シブ5時』、国内外のニュースを深く、多角的に掘り下げて伝える夜のメインニュース『NHKニュース7』や『ニュースウォッチ9』を放送した。

また、夜11時台には、若い人にも見てもらえるようSNSなどを活用して視聴者との直接のやりとりも意識しながら1日を振り返る『ニュースチェック11』を新設した。

さらに1週間のニュースをまとめて伝える『週刊 ニュース深読み』、海外のニュースに特化して分かりやすく伝える『これでわかった！世界のいま』、これらの番組で幅広い視聴者層の関心に応えた。

熊本地震などの災害や、オバマ大統領の広島訪問など大きなニュースの際は、放送枠の拡大や特設ニュースによって分厚く速報した。16年度の放送枠の拡大回数は248回・約58時間、特設ニュースは368回・144時間以上に達した。また、視聴者にいち早く情報を知らせるため画面に文字で第一報を伝えるニュース速報は全国向けだけで1,056回に及び、主要なニュースのほか地震情報や交通情報など安心・安全に直結する情報を伝えた。

(2) Eテレ

手話ニュースは、毎日伝える『NHK手話ニュース』と平日夜の『NHK手話ニュース845』、土曜の『週間手話ニュース』、日曜の『こども手話ウイークリー』の4番組を放送した。また、4月の熊本地震の際には、定時枠とは別に特設ニュースを立ち上げるなど、防災報道に力を入れた。

(3) BS1

『BSニュース』は、毎日毎時50分から10分間を基本に24時間、国内外のニュースや各地の話題をコンパクトにまとめて伝えた。

『BS列島ニュース』は、平日の午後1時から1時49分までの49分間で、全国各地のNHKの放送局がその日の昼に伝えたニュースや地域放送で伝えたリポートをまとめて全国に発信、3月10日に東日本大震災6年の特集番組として、キャスターを福島に派遣、キャスター制作のリポートを交

え、福島局女性キャスターと共に福島の課題について中継した。

(4) R1・FM

ラジオニュースは、東日本大震災の災害報道を教訓に、災害時やそのおそれがある時に“減災”に役立つ「安心ラジオ」の機能を高めるため、16年度も緊急対応力の強化を図った。

まず、さいたま局報道別館に設置されているラジオ放送用のブースの機能強化を実施した。このブースは首都直下地震によって放送センターからの放送ができなくなった場合に備えて、関東向ローカルニュースを放送するために設置されている。しかし、従来のブースには遮音のための設備がなく、外部の音（隣接する消防署・警察署の緊急車両のサイレンや選挙カーの街宣など）がそのまま放送に出てしまうという欠点があった。これを解消するためにブースを防音にするとともに、大きさも一回り大きくして出演者2人+デスク1人の3人での運用ができるようにした。出演者を1人増やすことになったので、緊急時の長時間放送に耐えられるようになった。

12月末に完成したばかりのブースは早速、放送にも使用した。2月にさいたま局報道別館から19時ニュースを30分にわたって放送した。NHKラジオのメインニュースを東京以外から送出したのは初めてのことである。

さいたま局報道別館を使った従来からの送出訓練も継続した。2か月に1回、午後2時半と3時半のニュースを送出する計画で、中止・延期もあったが、ブース改修直前まで継続した。

火災等によってラジオセンターの機能が停止したもの、TOCの機能が維持されている場合にラジオニュースを送出する代替スタジオの機能整備も行った。番組制作用のCR401スタジオに報道情報端末用のケーブルを整備し、緊急時には端末を持ち込んで使用できるようにした。2月には昼のローカルニュースの送出訓練を行った。

10月、南海トラフ巨大地震を想定した大規模災害ラジオ送出訓練を実施した。出先からの中継では衛星電話のほか、携帯電話回線の輻輳に備え、最近使用されることが減ったワイドバンド無線のばらし中継も訓練した。この訓練は、翌11月の津波警報の放送に実際に生かされた。

4月の熊本地震では14日の発生後、翌日の夕刻までと、16日未明の本震後、夜まで地震のニュースを続けた。特に、大きな余震があった時は、壊れやすい建物や避難時の注意など命を守る放送を心掛けた。ホームページと「らじる★らじる」では

熊本ローカルの同時提供をし、最大で1日1万5,000の利用があった。

また、10月21日の鳥取県中部地震（震度6弱）をはじめとして、北海道・福島・沖縄・茨城での震度5弱以上の地震では、通常番組を脱してR1・FM・R2の3波で地震関連のニュースを伝えた。

これらの地震では、発生直後に広範囲で停電が起き、被災者にとってはラジオが何よりも頼りになる情報源となったので、長時間にわたって地震のニュースを続け、被災者に寄り添う放送を目指した。

台風も観測史上2番目に多い6個が上陸し、北海道・東北など広範囲に被害をもたらした。これに際しても通常番組を脱して台風特設ニュースを伝えた。各局のサブステ参加だけでなく、ラジオセンター独自で中継を出して「減災」という観点から解説を含めて伝えた。

東日本大震災6年に際しては特番に加えて、19時ニュースでも被災地中継ロービングを含めて直前の1週間、さまざまな角度から被災地の抱える課題を掘り下げる企画を放送した。熊本地震半年でも現地から中継で被災地の表情を伝えた。夏から秋の大河シーズンには「防災」「減災」を目的としたリポートを19時ニュースで1週間シリーズとして放送した。

災害以外では7月に参議院議員選挙・都知事選という大きな選挙があった。参議院議員選挙では10時間余りの開票速報を放送し、選挙区の全当選者73人を含む過去最多の94人の音声を使用した。都知事選では有力3陣営にラジオセンター独自の中継クルーを出した。

11月の米大統領選挙はまれに見る激戦となつた。R1では午前中から毎正時のニュース枠を拡大して開票速報を伝えた。また、午後5時からは2時間枠の特番を構え「らじる★らじる」のアクセス数が通常の3倍近くなるなど好評を博した。トランプ大統領関連では1月の就任式に合わせて『池上彰 2017世界を読む』も放送し、視聴者の好評を得て2回目の放送も決まった。

このほか天皇退位、相模原障害者殺傷事件、プーチン大統領来日といった大きな節目ではニュース枠を拡大するだけでなく特番も制作し、視聴者に対して、さまざまな角度から情報を提供した。

8月にはリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックが開かれた。いずれも朝・正午・19時ニュースで日本人選手の結果を中心により深く伝えた。特にオリンピックは正午ニュースを10分枠広げて（土日祝を含む）音声・国内の独自中継と

ともに伝えた。

2. ニュースサイト「NHK NEWS WEB」

各分野のニュースをインターネットで原則1週間公開。取材記者が深く掘り下げる署名記事「WEB特集」や、テレビでは伝えきれないネットの話題をいち早く取り上げる「NewsUp」を毎日掲載している。サイト全体のPVは15年度の1.5倍に近い7億1,000万に達した。

(1) 放送同時提供、ライブストーミング

総合テレビの特設ニュースをサイトで配信する放送同時提供は、熊本地震や天皇陛下のお気持ち表明、米大統領選挙など15年度の3倍以上にあたる28回実施した。また、ライブストーミングは15年度の約6倍にあたる107回を行い、緊急ニュースに加え「広島カープ優勝パレード」や「奈良若草山山焼き」といった地方の話題でも行った。

(2) NHKニュース・防災アプリ

6月には最新ニュースや防災情報を伝えるスマート向けの「NHKニュース・防災アプリ」を公開。ダウンロード数は3月時点でおよそ170万に達した。効果的にプッシュ通知を行い、ダウンロードに占める訪問者の割合も1週間で平均50%、1日で平均20%の高い水準を維持した。

(3) 特設コンテンツの展開

注目のニュースや災害時は特設サイトを立ち上げ、情報をまとめて分かりやすく提供した。EU離脱を決めた英国民投票や米大統領選挙、日欧首脳会談、ノーベル賞等では独自コンテンツを加え、充実したサイトを公開。このうち、米大統領選挙の開票速報は1日で500万PVに達した。

3. 支局

[北海道]

広大なエリアを抱える北海道で日夜地域に密着した取材を続ける支局は重要な役割を果たしている。

札幌局・千歳支局は、新千歳空港が大雪に見舞われてダイヤが大幅に乱れ1月までに1万人余りが空港内で宿泊する混乱ぶりや、雪の影響で旅客機がオーバーランしたトラブルを全国に伝えた。

札幌局・小樽支局は、外国人旅行客の増加に伴い外国人による不動産取引の実態を伝えた。

札幌局・岩見沢支局は、財政再建中の夕張市が破綻から10年を過ぎて地域再生のために街づくりの方針を転換したことを伝えた。

旭川局・稚内支局はJR北海道の路線見直しを受けて関連のニュースを数多く放送した。11月に

は宗谷線の現状や存続を目指す地元の取り組みについてリポートするなど多角的に伝えた。また、海を挟んで国境を接するロシア・サハリン関連の取材も積極的に行い8月には稚内とサハリンを結ぶフェリーの運航再開についてリポートした。

釧路局・根室支局は日欧首脳会談に合わせて北方領土の元島民の思いを伝える企画を放送、連日生中継で全国・海外に発信した。また、水揚げ6年連続日本一のサンマ、ロシアの排他的経済水域でのサケマス流し網漁禁止の影響、羅臼町の土砂災害等も詳しく伝えた。

室蘭局・苫小牧支局は、地元で盛んなシシャモ漁やアイスホッケーなど地域の話題のほか、IR推進法の成立で進むIR誘致の動き、さらに北海道内の港湾貨物のおよそ5割を扱う苫小牧港を抱える地元の北極海航路への期待をリポートや記者解説などで伝えた。

[東北]

東北の支局は、6年となる東日本大震災からの復興の動きや東京電力福島第一原発事故の影響や課題を伝えたほか、人口減少や過疎化が進む中での地域の取り組みなどを伝えた。

仙台局・石巻支局は、児童など84人が犠牲になった大川小学校を巡って遺族が損害賠償を求めた裁判が行われ、10月に遺族が勝訴した裁判や校舎保存の取材にも力を入れた。また、熊本地震で現地に入った宮城県東松島市の職員に密着し、震災の教訓がどう生かされたのかを取材したほか、長引く仮設住宅での暮らしの課題も取り上げた。

仙台局・気仙沼支局は、南三陸町のさんさん商店街が仮設から本設に移る過程を長期間、取材し番組で伝えた。新たに校舎全体の保存が決まった気仙沼向洋高校で震災遺構の問題を取り上げたほか、20年連続水揚げ日本一の気仙沼市の生鮮カツオや南三陸町の特産の杉といった地域経済も取材した。

盛岡局・大船渡・陸前高田支局は、陸前高田市で進む被災地最大規模のかさ上げ地の現状を伝えたほか、家族の死を乗り越えようとする人や再婚した男性、死亡届を出せない女性など、さまざまな遺族の思いに迫った番組やリポートを全国に発信し、震災6年の被災地の現実を伝えた。

盛岡局・宮古支局は、台風10号が岩手県に上陸した翌朝、大きな被害を受けた岩泉町からいち早く中継して被害状況を全国に伝えたほか、厳しい冬の暮らしに寄り添い続け、復旧・復興を後押しする取材を展開した。また、宮古市などの震災復興についても住民の思いや企業の課題を発信した。

盛岡局・釜石支局は、大槌町が発刊した証言集「生きた証」を巡る遺族の思いや仮設住宅暮らしの実態を番組などで全国に発信した。また、台風10号で再び被災した住民や漁業者の問題や釜石市が会場の1つとなる19年のラグビーW杯への動きや期待の声なども全国に伝えた。

福島局・郡山支局は、県の経済の中心である郡山市の取材だけでなく原発事故による避難指示が解除された富岡町や葛尾村の住民の帰還の動向を取材したほか、再生可能エネルギー・ロボットなど産業の復興に関わるニュース・企画を発信した。

福島局・会津若松支局は、県西部の4割の地域を受け持ち、事件・事故や災害に対応するとともに独自の文化を持った会津の催し物などを発信した。また、会津若松市に役場が避難している大熊町も担当し、帰還困難区域や中間貯蔵施設の予定地を抱える自治体の苦悩を伝えた。

福島局・いわき支局と南相馬支局は、福島第一原発が立地する浜通り地域を担当。南相馬市小高区など避難指示が解除された地区の様子やJR常磐線の再開通に向けた動き、サッカーのナショナルトレーニングセンターであるJヴィレッジの復旧などについて発信し、原発事故の後の周辺自治体の姿を追った。

秋田局・大館支局は、鹿角市の山中で山菜採りの人が相次いでクマに襲われて合わせて4人が死亡した事故を取材し、クマ出没が増加している実態やその背景と指摘される生息環境の変化などを伝えた。また、海外で高まる秋田犬の人気を地域振興に結び付け、海外からも観光客を呼び込もうとする県北地域の取り組みを継続的に発信した。

秋田局・横手支局は、高齢化や人口減少をICTで乗り越えようと住民にタブレット端末を配布し、ネットでつなぐ見守りを行っている動きを伝えた。また、小野小町伝説が残る湯沢市で、ユニークな「びじん証明書」を発行するボランティアを取材し、交流人口の拡大に一役買っている話題を伝えた。

山形局・鶴岡支局は、国の機関の地方移転の一環で鶴岡市に拠点を設けた国立がん研究センターの研究者の新薬開発にかける思いを伝えた。また、数々の時代小説を書いた鶴岡出身の作家で没後20年の藤沢周平の作品が、地元高校生たちに読み継がれている動きを全国に発信した。

山形局・酒田支局は、05年にJR羽越線の特急列車が脱線して5人が死亡した事故の発生から11年になるのに合わせて、気象レーダーをはじめとした安全対策をニュース・企画で報じた。また、

76年の酒田大火から40年がたち、大火の教訓を対策に生かす県内外の取り組みを全国に伝えた。

山形局・米沢支局は、唾液に含まれる成分に着目し、米沢市の山形大学が進める人間のストレスを数値化するセンサー開発の動きを企画で報じた。また、江戸時代に米沢藩が飢きんに備えて、食用が可能な植物をまとめた冊子に関する話題を紹介した。

青森局・八戸支局は、女子レスリング・伊調馨選手の五輪4連覇と国民栄誉賞受賞に沸く出身地の八戸市で、家族や恩師などを丁寧に取材し、試合ではうかがい知れない素顔を全国に報じた。また、八戸港が水揚げ日本一のスルメイカの記録的な不漁とその影響も詳しく伝えた。

青森局・弘前支局は、高校として全国初の「グローバルGAP」という農業の国際認証を取得した五所川原農林高校に密着し、地元農家の農作物輸出を後押しする高校生の姿をニュースや番組で報じたほか、リンゴ農家の後継者不足を解消するため定職を持たない都会の若者を招く取り組みを全国に発信した。

青森局・三沢支局は、使用済み核燃料の再処理工場の本格運転に向けて、建設作業員が増加し、経済が潤い始めた六ヶ所村の現状や、東日本大震災の津波を教訓に、徹底した防災教育に取り組む三沢市の保育園を取材し、企画ニュースで報じた。

青森局・むつ支局は、北海道新幹線で函館を訪れる観光客を、特産のマグロを生かして大間町に呼び込もうとしている女性グループや、村おこしに協力するため佐井村に移住してカフェを開業した28歳の男性を取材し、地域活性化に向けた新たな動きを伝えた。

[関東甲信越]

長野局・松本支局は、3月に発生した9人死亡の県防災ヘリ墜落事故で、警察や運輸安全委員会の動き、それに遺族の思いなどを精力的に取材し、全国と地域に詳しく発信した。

長野局・飯田支局は、リニア中央新幹線の工事開始や地元に建設予定の新駅の計画、それに反対する人たちの思いなどを多角的に報じた。

新潟局・佐渡支局は、42年ぶりとなった国の特別天然記念物トキの純野生のヒナの巣立ちで喜びに沸く地元住民の声を伝えた。

新潟局・長岡支局は、東京電力柏崎刈羽原子力発電所の再稼働への対応が争点となった柏崎市市長選挙の結果と背景を全国に発信した。

新潟局・上越支局は、12月に糸魚川市で強風による飛び火で147棟の住宅や店舗が焼けた大規模

火災を精力的に取材し、関連ニュースや特集を地域や全国に報じた。

甲府局・富士吉田支局は、富士山噴火を想定した住民の広域避難訓練について課題も含めて詳しく伝えたほか、四季折々の美しい富士山の映像を全国に発信した。

甲府局・大月支局は、7月に大月市で小学生が川に流された事故を全国に伝えた。

横浜局・横須賀支局は11月、米大統領選挙で在日米軍の撤退に言及していたトランプ氏の勝利に揺れ動く基地関係者の姿をリポートで伝えた。

横浜局・厚木支局は、7月に相模原市の知的障害者施設で19人が殺害された殺傷事件を取材し、被害者の家族や施設関係者の思いを全国に向けて発信した。

横浜局・小田原支局は、生活保護を担当する市職員が不適切な文言が書かれたジャンパーを着用していた問題の実態や再発防止の動きを伝えた。

横浜局・鎌倉支局は、東京五輪でセーリング競技の会場となる藤沢市で行われたテロ対策訓練など、大会本番に向けた準備の動きを伝えた。

前橋局・沼田支局は、『大河ドラマ』「真田丸」の番組効果で、舞台のひとつとなった沼田市が観光客でにぎわうようになった様子を取材した。

前橋局・両毛広域支局は、大泉町で生活する外国人の子どもたちを放課後預かり、日本語を教えたり、食事をさせたりするNPO法人の活動が資金面で苦しんでいる地域の課題について伝えた。

宇都宮局・両毛広域支局は9月、関東・東北豪雨から1年の節目に、浸水被害の情報が相次いだことで混乱した栃木市役所の当時の状況を担当者や住民にインタビューし、災害時の情報発信の課題を伝えた。

宇都宮局・大田原支局は3月に那須町の茶臼岳で登山訓練中の高校生らが雪崩に巻き込まれて8人が死亡した事故で、捜索に向かう救助隊など事故直後の状況を取材したほか、献花台を訪れる関係者などのインタビューを伝えた。

水戸局・つくば支局は9月、関東・東北豪雨から1年になるのに合わせて、水害で大きな被害を受けた常総市での被災後の生活再建や人口減少の課題などを多角的に検証して発信した。

千葉局・成田支局は9月、成田空港の機能強化に向けた運用時間拡大などの案を巡り、空港間の競争激化や騒音などに悩まされる住民の反応など背景や課題を多角的に伝えた。また、航空機からの落下物対策や保安検査員の離職問題など、知られざる課題を伝えた。

千葉局・銚子支局は8月、台風接近に伴う自治体の対応や避難状況などを市中心部と漁港から機動的に中継で伝えた。

千葉局・東葛支局は10月、地域の象徴として親しまれてきた回転展望レストランがある百貨店の閉店を惜しむ思いをリポートした。

千葉局・房総支局は、あわびや伊勢エビなど地域の特産品の話題や、木更津駐屯地に飛来した米軍の輸送機「オスプレイ」に対する住民の反応などの情報を発信した。

さいたま局・秩父支局は明治時代以来、国内での生存が確認されていないニホンオオカミを探し続ける県内の男性の活動とその思いを伝えた。

さいたま局・所沢支局は西武鉄道が4月に運行を始めた“観光列車”を取り、沿線の観光資源とともに、その魅力を伝えた。

さいたま局・熊谷支局はラグビーW杯の開催を控えた熊谷市で、ラグビー教室やテロ対策訓練などを伝えた。

さいたま局・春日部支局は東日本大震災と原発事故から6年になるのに合わせて、住宅の無償支援の終了など大きな岐路に立つ県内の避難者の現状と課題を伝えた。

首都圏放送センター・多摩支局は、5月、東京・小金井市で、音楽活動をしていた女子大学生が男にナイフで刺され一時、意識不明の重体になった事件の裁判員裁判を取り、心身に受けた傷の深さを訴える被害者の法廷での意見陳述を含め、判決が言い渡されるまでの審理過程を報じた。

〔中部〕

愛知県では5月、伊勢志摩サミットの開催に伴い、名古屋局・小牧支局は、移動に使う米軍のオスプレイが県営名古屋空港に飛来したことをいち早く報じたほか、名古屋局・中部空港支局は、米オバマ大統領など各国首脳が到着するのに備えた空港会社や地元消防の態勢強化の様子を取材した。

7月、小牧支局は、南スーダンでの政府軍と反政府勢力の銃撃戦を受け、現地邦人を避難させるため、航空自衛隊小牧基地から輸送機が出発する様子を取材し伝えた。

9月、御嶽山噴火から2年で、小牧支局、中部空港支局は、息子や娘を亡くした父親の思いを取材した。

10月、ノーベル医学・生理学賞の受賞者に、13年間、愛知県岡崎市にある「基礎生物学研究所」で研究に取り組んだ東京工業大学名誉教授の大隅良典さんが選ばれた。名古屋局・岡崎支局を中心に、ゆかりの人物、行きつけの店などを取材し、

人柄なども含め多角的に伝えた。

11月、「ポケモンGO」をしていた男性が運転する車に小学生がはねられて亡くなる事故を受け、小牧支局は、遺族の思いを伝えるために県警担当と共に取材にあたった。また、中部空港支局は、ボーイング社から中部空港に寄贈されたB787初号機を展示する新たな商業施設について、その詳細を全国放送でも伝えた。

2月、小牧支局は、一宮市の男子中学生が担任教諭への不満を記したメモを残して自殺した問題について、その背景や動機に迫る報道を続けた。

石川県では5月、金沢局・能登支局が、高齢化で後継者不足に悩む漁業で、会社組織にして給料を固定給にしたり、独自のマニュアルを作成して経験のない人でも仕事を覚えやすいようにしたり意欲的な取り組みで若い漁師たちを集めている定置網漁の会社について、特集番組で全国に放送した。

10月、小松市の安宅の闇跡で歌舞伎十八番の1つ「勧進帳」の特別公演が実現した。その背景には、歌舞伎俳優の市川海老蔵さんの亡き父親・團十郎さんの強い思いがあったことを金沢局・小松支局が海老蔵さんや地元の関係者を取材してリポートで伝えた。

2月、輪島市に建設が計画されている産業廃棄物の最終処分場を巡って、賛否を問う住民投票が行われた。金沢局・輪島支局は、地元で関心の高いこの問題について、賛成・反対の市民らの声を丹念に取材して、背景にある過疎問題を含めて長期にわたって伝えた。

静岡県では、1月から浜松市を舞台にしたNHKの『大河ドラマ』「おんな城主 直虎」の放送が始まったのに合わせて、地域の取り組みを取材し伝えた。

掛川市にあり、長年にわたってフォークソングの聖地として親しまれた複合リゾート施設「つま恋」が12月に一般営業を終了し、静岡局・掛川支局では別れを惜しむ音楽ファンなどの様子を全国ニュースで伝えた。

沼津市を本拠地とするサッカークラブ「アスルクラロ沼津」のサッカーJ3への参加が11月、正式に決まった。静岡局・沼津市局では、「ジュビロ磐田」「清水エスパルス」「藤枝MYFC」に次ぐ、4つ目のJリーグのクラブ誕生に合わせて“サッカー王国静岡”的復活を期待する様子を伝えた。

伊東市で、2人の子どもが父親から虐待を受け死亡した事件を受けて、静岡局・伊東市局では、対策を強化した県内の児童相談所に対し、半年間にわたって密着取材を行い、1月の番組『目撃！』

日本列島』で全国放送した。

福井県では、原子力規制委員会から運営主体を見直す勧告が出されていた敦賀市の高速増殖炉「もんじゅ」の今後が、最大の懸案事項。福井局・嶺南支局を中心にトラブルの度に提言されてきた組織改革の内容などを検証し、管内特番で放送した。その後、政府が廃炉を決定。もんじゅ失敗の総括なしに次の高速炉開発を進める問題点や今後の高速炉開発の行方を検証する『クローズアップ現代+』を科学文化部と12月に制作した。

また、高浜原発では1月、作業用の大型クレーンが強風で転倒する事故が起き、事故原因を検証。裁判所の仮処分で運転が停止していた3・4号機について大阪高裁が再稼働を決定し、嶺南支局を中心に内容を解説するなど、毎月1、2回は原発を巡る企画を放送した。

富山県では、12月、ユネスコの無形文化遺産に日本の「山・鉢・屋台行事」が登録されることが決まった際、高岡市の「高岡御車山祭の御車山行事」、魚津市の「魚津のタテモノ行事」、南砺市の「城端神明宮祭の曳山行事」の3つの祭りが登録されることになった。富山局・魚津支局と高岡支局では、決定を待ち受ける関係者の様子や継承に向けた課題などを中継も交え全国に伝えた。

12月の日口首脳会談で魚津支局は、北方領土からの引き揚げ者が富山県は北海道に次いで多いことを踏まえ、黒部市在住の元島民や家族の思いを中継も交えて報じた。

16年度の富山市の政務活動費の不正問題は高岡市議会議員にも及び、高岡支局は大量の資料を検証しながら不正発覚や辞職の動き、再発防止の取り組みを随時報じた。

三重県では、5月、伊勢志摩サミットが開催され、津局・伊勢支局は厳重警備による住民生活への影響や特産の真珠のPRに乗り出す真珠業界の動きを取り組み、リポートや番組に展開した。

2月以降、津局・四日市支局が東芝の経営再建に伴う四日市市の半導体工場売却について、地元への影響を取材した。

津局・尾鷲支局の担当地域は、豪雨災害や南海トラフ巨大地震への対策が課題で、紀伊半島豪雨の教訓を伝える取り組みや事前行動計画「タイムライン」を地域防災に取り入れる動き、自治体庁舎耐震化の課題などを取材した。サンマ不漁の影響などを伝えた。

岐阜県では、岐阜局・高山支局が御嶽山の噴火災害後の、地元の自治体や火山防災協議会の対応を継続して取材、観光産業への影響や当時、救助

活動に携わった山岳救助隊員の思いを2年目の節目に合わせて取り上げた。また、国際観光都市・高山市の外国人観光客を迎える“おもてなし”的施策をはじめ、12月にユネスコの無形文化遺産に登録された高山祭や、アニメ映画のモデルになり、聖地巡礼として多くのファンが訪れた飛騨市の観光客誘致の取り組みなどを全国に伝えた。

岐阜局・多治見支局は、リニア中央新幹線の「岐阜県駅」設置が予定されている中津川市や沿線自治体の取り組みを随時伝えた。担当エリアの岐阜県東部の東濃地方は“野球”で脚光を集めた。6月に大学日本一になった中京学院大学、高校野球で夏の甲子園に出場した中京高校、春のセンバツに21世紀枠で出場した多治見高校の横顔をそれぞれリポートで紹介した。

〔近畿〕

近畿管内の各支局は、16年度も豊かな自然と悠久の歴史・文化を背景に、今の時代を象徴する現象や時流を彩るさまざまな事象を取材し放送した。

まずは、関西の空の玄関口を取材拠点とする関西空港支局では観光客にまつわる取材を行った。

16年に関西空港を利用した外国人は、空港の利用者の半数近くを占める1,200万人を超えて、過去最多となった。1月下旬から2月上旬にかけては、中国の旧暦の春節の時期にも重なり、さらに外国人が増加。関空支局ではこのタイミングに合わせ、大阪入国管理局に密着取材を敢行。9月には指名手配犯の韓国人を見逃してしまうなど緊張感が増す中「迅速さ」と「厳格さ」の両立を図る入国管理官の姿を取材した。

一方、17年3月、国内初のLCC（格安航空会社）「ピーチ・アビエーション」が関西空港を拠点に就航してから、5年の節目となった。ピーチが路線拡大を推し進めるため沖縄に新たな拠点を設けることを社長の単独インタビューなども交えて伝えた。

また、関空支局は大阪府南市で、市議会議員が政務活動費を不正に受給していた疑惑を伝えたが、これによって刑事告発や公開の方法の変更などの動きにつながった。

和歌山局・南紀新宮支局では、川の氾濫や土砂災害が相次ぎ、和歌山県内で60人が犠牲になった紀伊半島豪雨から5年目の現状を取材した。大規模な土石流が発生した那智勝浦町で取材を継続し、今なお残る危険性を伝えた。また、南海トラフの巨大地震に備える自治体や住民のユニークな動きも取材した。

南紀田辺支局では、白浜町で進められているジ

ャイアントパンダの飼育に長期間にわたる密着取材を行った。出産前から子育てに至る一部始終を記録して、番組やニュースリポートで伝えた。また、「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産への追加登録や、防災への取り組みなどを取材した。

串本支局では、黒潮に乗って北上してくるはずのカツオの水揚げが減少していることについて、和歌山県水産試験場が、日本から遠く離れた熱帯地域における世界各国の取り過ぎの影響が懸念されていると分析したことを報道。また、日本への接近が相次いだ台風については逐次、中継などを交えながら伝えた。

橋本支局では16年に、真田家ゆかりの真田庵や世界遺産の慈尊院、それに真田家について紹介する施設（真田ミュージアム）などが大勢の人でにぎわった様子を伝えた。また、地元出身の中村智太郎選手がパラリンピックの平泳ぎで健闘する姿を大勢の人たちが応援する様子を取材した。

神戸局管内の各支局、まずは姫路支局について、姫路市では公共工事を巡る汚職が相次いで摘発され、建設局長や課長が有罪判決を受けた。これを受けて姫路市は、第三者委員会を設け、事件の背景を探るとともに監察室の設置といった再発防止策をまとめたが、その過程で職場内の法令順守意識が低いことなどが指摘された。姫路支局は、こうした動きを随時伝えて、問題の背景に迫った。また、外来生物が問題となる中、兵庫県でも、あゆ釣りの名所と知られる揖保川の支流で、体長1メートルほどの北米原産のアリゲーターガーという肉食の魚の目撃情報が相次ぎ、地元の漁協がさまざまな方法で捕獲を目指した。外来種生物の生態系への深刻な影響と、駆除の難しさについて伝えた。さらに、平成の大修理が終わった姫路城・大天守の魅力を伝えようという地元のさまざまな取り組みを取材した。

豊岡支局では、農業に関する国家戦略特区に指定されている養父市で行われている継続的な農業の発展を目指すさまざまな動きを伝えた。また、広がるクマの被害とその背景を伝えた。

淡路支局では、淡路島が、4月に、古事記に記された「国生み神話」の舞台だとして、日本遺産に選ばれたことを伝えた。また、10月には、南あわじ市で見つかった松帆銅鐸に関する研究成果を伝えた。力士「照強」が16年の九州場所で幕下優勝し、17年の初場所で十両に昇進。地元での期待の声や、里帰りした照強の震災への思いなどを伝えた。

京都局で京都北部を管轄する丹後舞鶴支局で

は、伝統産業の維持の一方、観光客誘致に頭を悩ませる自治体の現状を追った。

京都南部を管轄する学研都市支局では笠置町で、地域おこしのために町民の7人に1人が参加した短編映画の撮影の様子を伝えた。

大津局の彦根支局は、10年目になった彦根市のご当地キャラクター「ひこにゃん」を中心とした地域の取り組みを伝えた。また、8月、リオデジャネイロオリンピックの陸上男子400メートルリレーで彦根市出身の桐生祥秀選手が銀メダルを獲得し、盛り上がる地元の様子を伝えた。10月、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡「稻部遺跡」の考古学上の発見について全国発信した。17年1月、滋賀県では北部を中心に大雪となり、彦根市では33年ぶりに50センチを超える積雪が観測され、地域の苦労を伝えた。

奈良局の支局、奈良やまと路支局では、橿原市出身で金メダルを獲得した女子バドミントンダブルス「タカマツペア」こと高橋礼華選手に対する地元の応援を伝えた。

同じく8月には、11年9月、発生した紀伊半島豪雨から5年の節目を迎えた奈良県南部の被災地を取材。災害を受けて、住民が流出し過疎に拍車をかけた厳しい現状や、大雨で山が丸ごと崩壊する「深層崩壊」の不安に悩みながら対策を模索する動きを取り材。十津川村の「村内移住」の動きについては継続取材し全国にも伝えた。3月、センバツ高校野球で15年、悲願の初優勝を果たした五條市の智弁学園と共に、大和高田市の高田商業が23年ぶりに出場。両校の動きを随時伝えた。明日香村のキトラ古墳の壁画の修復が終わり、保存公開する施設「壁画体験館」が9月、新たに地元にオープン。その経緯や地元の動きを伝えた。

〔中国〕

中国地方の各支局は、災害報道や地域の課題、それに米ロの大統領の訪問などについて、最前線で取材にあたり、国内外に発信した。

5月、アメリカのオバマ大統領が、現職の大統領として初めて被爆地・広島を訪問した。広島局は、大統領の訪問に合わせて、特設番組や、シリーズ企画などを放送したが、この中で、広島局・福山支局は、地元の被爆2世の人を取材し、訪問への期待や核廃絶への思いを伝えた。広島局・呉支局は、太平洋戦争中に呉市の旧海軍工しょうで建造され、鹿児島県沖で沈没した世界最大の戦艦・大和について、市の潜水調査を継続的に取材し、海底に沈む船体の映像などを詳しく伝えた。

岡山局・倉敷支局は、4月に発覚した三菱自動

車工業による燃費データ不正問題を受けて、倉敷市の工場が生産停止に追い込まれた状況や地域経済に及んだ影響を継続して取材し、問題に揺れ動く地元の姿を企画や番組で伝えた。

島根県では、12月、8年前に浜田市の女子大学生が殺害されて遺体が見つかった事件で、すでに死亡していた男が、殺人などの疑いで書類送検された。この事件を『NHKスペシャル』「未解決事件」などで伝えてきた松江局・浜田支局は、警察の発表を現場から中継するなどして、捜査の状況を詳しく伝えた。1月、益田市内で登校中の児童の付き添いのボランティアを約15年間続けてきた男性が、飲酒運転の車にはねられ死亡する事故が発生し、松江局・益田支局は、地域の安全の課題を伝えた。

鳥取県では、10月に、県の中部を震源とする最大震度6弱の地震が発生し、9市町村で約1万5,000棟の住宅に被害が発生した。鳥取局は、地震の発生直後から、減災報道に取り組んだが、鳥取局・倉吉支局は、被害の実態をはじめ、住民の暮らしや、地域の産業などについて、復旧・復興の現状や課題を継続的に伝えた。12月、鳥取県岩美町の漁船が、島根県松江市沖で転覆し、乗組員4人が死亡、5人が行方不明となる事故が発生した。鳥取局・米子支局は、現場海域での捜索を取材し、全国に伝えた。また、2月に鳥取県内は、記録的な大雪となり、各支局も、国道での長時間の立ち往生など、雪の被害や生活への影響を取材し、全国に伝えた。

山口局・岩国支局は、5月のオバマ大統領の広島訪問で、大統領が経由地のアメリカ軍岩国基地に立ち寄った際、その様子を中継で全国にリポートした。12月、ロシアのプーチン大統領が、安倍総理大臣の地元の山口県長門市を訪問し、日ロ首脳会談が行われた。山口局・萩支局は、訪問に合わせて、地元の歓迎の動きやロシアに特別な思いを寄せる人たちの思いをリポートした。

〔四国〕

四国地方の各支局は、この一年、災害報道の拠点として大きな役割を果たしたほか、地域に密着した課題などを取材し、全国へ発信した。

8月、四国電力伊方原子力発電所の3号機が再稼働した。松山局・八幡浜支局は、再稼働を巡る地元自治体や住民の動きのほか、地震や津波による原発事故を想定した住民避難の課題などについて継続的に取材し、全国に発信した。

愛媛県東部にある松山局・新居浜支局は、過疎が進む地域の中学校を舞台に、グローバル人材を

育てる学校に変えていくこうとする取り組みを全国に発信するなど、地域課題の解決に役立つニュースを伝えた。

2月、愛媛県立宇和島水産高校の実習船えひめ丸がハワイ沖で米軍の潜水艦に衝突され9人が犠牲になった事故から16年となり、安倍首相がハワイで慰霊碑に献花を行った。松山局・宇和島支局は、高校で行われた追悼式を取材し、事故を忘れず、海の安全を祈り続ける地元の思いを発信した。

高知県西部にある高知局・くろしお支局は、9月、台風16号の影響による浸水被害の状況などを取材し、最前線で災害情報の発信を続けた。3月には、選抜高校野球大会に21世紀枠で出場した高知県立中村高校が、40年ぶりの出場として注目を集めると、喜びに沸く地元の様子などを伝えた。

徳島局・阿南支局は、9月、台風による浸水被害などを取材し、災害報道の拠点としての役割を果たした。12月には、昭和南海地震から70年の節目に合わせ、南海トラフ巨大地震による津波被害に対する地元の小学校の備えなどを取材し、子どもたちの命を守る取り組みを伝えた。

10月、香川県観音寺市で祭りの太鼓台に大型トレーラーが衝突する事故が発生し1人が死亡、39人がけがをした。高松局・丸亀支局は、直ちに事故現場で取材を開始し、緊迫した状況を伝えた。

瀬戸内海の島々などでは、3年に一度の現代アートの祭典「瀬戸内国際芸術祭2016」が開かれ国内外から104万人余りが訪れた。高松局・小豆島オリーブ支局は、巨大なアート作品を紹介するなど、海外でも高い評価を受ける芸術祭の情報や地元の様子を発信した。

〔九州・沖縄〕

4月、鹿児島県鹿屋市の北の山あいで、航空自衛隊の航空機が消息を絶ち、後に墜落と乗員6人の死亡が確認された。鹿児島局・鹿屋支局は、通信が途絶えた直後から大規模な捜索など一連の経過を細かく取材して伝えた。

4月、2度にわたって震度7を観測した熊本地震が発生、熊本県と大分県で災害関連死を含めた死者が240人を超える甚大な被害となった。

熊本局・阿蘇支局は、地元にある阿蘇神社が倒壊し、国の重要文化財の建物に被害が出たこと、南阿蘇村で大規模な土砂災害が起き多くの人が避難生活を送っていること、そしてその後の復興に向けた動きなどを丁寧に取材し、全国に発信した。

大分局の日田支局、中津支局、佐伯支局もそれぞれ地震の発生直後から地域の被災状況を伝えるとともに、長期にわたって復興の動きを取材した。

4月、北九州市を起点とする東九州道自動車道が宮崎市まで開通した。北九州局・行橋支局は、周辺の自治体の取材を通して観光客の増加など、開通が地元にもたらす効果を伝えた。

6月、長崎県雲仙普賢岳で91年に起きた大火碎流から25年を迎えた。長崎局・島原支局は、慰霊の動きや防災や復興の現状などを発信し、減災報道に努めた。

7月、鹿児島県知事選挙で川内原発の即時停止を掲げた三反園訓氏が初当選した。鹿児島局・薩摩川内支局は、運転継続の賛否に揺れる地元の様子や九州電力の対応を継続して取材。九州電力が10月から17年3月にかけて行った特別点検の経緯も伝えた。

8月から10月にかけて、九州・沖縄には台風の接近や上陸が相次いだ。9月の台風16号による被害は激甚災害に指定され、10月の台風18号では沖縄本島地方に特別警報が発表された。

沖縄局・八重山支局や長崎局・五島支局は、台風の接近前から大雨に備える地元の様子を伝えたほか、隨時、避難状況や冠水被害などを伝えることで警戒を促し、減災報道に努めた。

宮崎局・延岡支局は、台風16号で記録的な大雨を観測した日向市の状況を中継で伝えた他、台風の通過後も被害状況や復旧に向けた動きを伝えた。

10月、熊本県の阿蘇山で36年ぶりに爆発的な噴火が発生した。熊本局・阿蘇支局は降灰の一報映像などを出稿、その後の火山活動の状況や観光への影響などを伝えた。

10月、水俣病が公式に確認されて60年の節目の慰霊式が、当初5月の予定だったのが熊本地震のため延期されて開かれた。熊本局・水俣支局は、差別に苦しむ患者などについて3本の企画を制作し、発信した。

11月、長崎県雲仙市で観光バスなどが追突し、修学旅行の熊本県の小学生など24人がけがをした。長崎局・諫早支局は、事故の様子をいち早く映像取材し、全国に伝えた。

12月、鹿児島と宮崎の県境にある霧島連山の硫黄山周辺で火山性地震が増加、噴火警戒レベルが2に引き上げられた。鹿児島局・鹿児島空港支局と宮崎局・都城支局は、登山者や住民の反応のほか、気象庁の観測状況を伝え、視聴者の注意喚起に努めた。

12月、沖縄県名護市の浅瀬に米軍の輸送機オスプレイが不時着して大破した。沖縄県・沖縄中部支局と名護支局は、事故現場や住民の反応、その後の飛行再開などの動きを継続して取材・出稿し

た。また、米軍普天間基地の移設計画で、2月に名護市辺野古沖の埋め立てに向けた海上工事が始まるに工事の状況や抗議活動、地元の反応などについてきめ細かく伝えた。

12月、福岡県飯塚市の市長と副市長が平日の日中に賭けマージャンをしていたことが発覚した。福岡局・飯塚支局は問題の発覚から1月に市長・副市長が辞職し、選挙になるまでの動きを伝えた。

1月、鹿児島県の奄美群島が世界自然遺産に推薦されることが決まった。鹿児島局・奄美支局は、国の特別天然記念物・アマミノクロウサギが、野生化したネコに襲われている現状や防止に向けた地元の取り組みなどを伝えた。

3月、福岡県大牟田市と熊本県荒尾市などにまたがる三池炭鉱が閉山して20年を迎えた。福岡局・大牟田支局は、今も課題となっている閉山後の街づくりをリポートなどで伝えた。

3月、佐賀県の玄海原発3・4号機の再稼働について、地元・玄海町の町長が、九州電力に同意を伝えた。佐賀局・唐津支局は、町長が同意するまでの経過や町議会の動き、反対の立場をとる伊万里市長の言動など、再稼働を巡る地元の動きを取材し発信した。

4. 海外総支局

17年3月31日現在、4総局・26支局の計30の総支局で計80人が業務にあたっている。

アジア総局管内では、16年6月にフィリピンの大統領にドゥテルテ氏が就任。取締りの過程で麻薬などの違法薬物の密売人などを殺害することも容認し、物議を醸してきた大統領への単独インタビューも行った。7月、中国が南シナ海のほぼ全域で管轄権を主張していることに対して国際的な仲裁裁判所が「国際法に違反する」と判断した際には速報態勢で伝えた。17年2月にはマレーシアのクアラルンプールの国際空港で北朝鮮のキム・ジョンウン（金正恩）朝鮮労働党委員長の兄、キム・ジョンナム（金正男）氏が猛毒のVXで殺害され、マレーシアと北朝鮮が相手の国民の出国を認めないと異例の展開をたどった事件について連日伝えた。

韓国ではパク・クネ（朴槿恵）大統領の長年の知人による職権乱用などの疑惑が浮上、大統領の退陣を求める圧力が強まり、大統領は、17年3月に罷免された。韓国で大統領が罷免されるのは初めてで、特設ニュースで伝えた。

北朝鮮は16年9月に5回目の核実験を強行。また16年から17年にかけては、弾道ミサイルを相次

いで発射。16年8月には発射された弾道ミサイルが日本の防空識別圏内の日本海に落下した。17年3月には、弾道ミサイル4発が同時に発射され、うち3発が日本の排他的經濟水域に落下。いずれも速報態勢で伝えた。

中国総局管内では、中国共産党の重要会議「6中全会」が16年10月に開かれ、習近平国家主席を初めて公式に「党中央の核心」と位置づけ、17年3月に開いた全人代（全国人民代表大会）でも習国家主席の下で団結するよう求めた。また、海洋進出を進める中国軍は、空母「遼寧」を初めて太平洋まで航海させた後、南シナ海で艦載機の発着などの訓練を行ったと発表。空母の運用能力が向上していることをアピールした。香港では、17年3月、5年に一度の行政長官選挙が行われ、中国政府の支持を得たとされる林鄭月娥氏が初当選した。

台湾では、民進党の蔡英文氏が総統に就任。その対中政策や外交などについて詳しく伝えた。

ヨーロッパ総局管内では、テロが絶えず、16年7月にはフランス南部のニースで花火見物の群衆にトラックが突っ込み、12月にはドイツの首都ベルリン中心部で開かれていたクリスマス市に大型トラックが突っ込み、多数の死傷者が出てた。イギリスでは、6月にEU（ヨーロッパ連合）からの離脱の是非を問う国民投票で、離脱派が勝利。フランスやイタリアでも反EU、反移民・難民を掲げる勢力が台頭し、EUの結束が問われる事態となつた。

ロシアのプーチン大統領は、12月に訪日。安倍総理大臣との間で北方領土での共同経済活動について、四島を対象に行うための特別な制度を設ける交渉を開始することで合意。17年3月には初の公式協議が行われ、ロシア側の動きを詳しく取材した。

トルコでは、イスタンブールの空港やナイトクラブが襲撃されるなどのテロが相次ぎ、16年7月には軍の一部によるクーデター未遂が発生。シリアでは、アサド政権側が反政府勢力の最大の拠点、北部の都市アレッポを12月に完全に制圧。国連の仲介による和平協議でも政権側と反政府勢力の対立が続き、内戦終結のメドは立っていない。

イラクでは、政府軍が過激派組織ISのイラクでの拠点モスルの制圧に乗り出したが、ISの完全な壊滅には至っていない。アフリカの南スーダンでは、16年7月に首都ジュバで政府軍と反政府勢力の間で大規模な戦闘が再燃。不安定な情勢が続いている。

アメリカ総局管内では、16年5月にオバマ大統領が現職の大統領として初めて被爆地・広島を訪問。12月には安倍総理大臣が真珠湾を訪問し、両国の和解をアピールした。一方で、大統領選挙では、自国第一主義を掲げるトランプ氏が勝利。大統領に就任直後にTPP（環太平洋パートナーシップ協定）からの離脱や中東などの人の入国を制限する大統領令を連発。こうしたトランプ政権の動向をつぶさに取材した。

南米では、16年9月にはブラジルのルセフ大統領が政府会計の不正操作に関わったなどとして、ブラジルの大統領としては初めて罷免された。キューバでは、フィデル・カストロ前国家評議会議長が死去。アメリカ総局管内から取材班が現地入りし、詳しく伝えた。

海外総支局では、国際放送の拡充に合わせて、きめ細かく出稿し、海外発信力の強化に貢献している。NHKのネットワークを生かして、グローバル化が進む世界の最新情勢を、正確かつ速やかに視聴者に伝えようと努めている。

NHKの海外総支局（17年3月31日現在）

- アジア総局（バンコク）：マニラ、ジャカルタ、ハノイ、ニューデリー、イスラマバード、シンガポール、シドニー、ソウル
- 中国総局（北京）：上海、広州、香港、台北
- ヨーロッパ総局（パリ）：ロンドン、ブリュッセル、ベルリン、ウィーン、カイロ、ドバイ、ヨハネスブルク、エルサレム、テヘラン、モスクワ、ウラジオストク
- アメリカ総局（ニューヨーク）：ワシントン、ロサンゼルス、サンパウロ

以上の30総支局に、記者、ディレクター、カメラマン、技術担当、経理担当、計80人の特派員が業務にあたっている。

VI. 気象情報

総合テレビの気象情報の放送時間は1日約1時間20分（平日）で、12人の気象予報士が各番組に出演した。台風や大雨などの際には定時ニュースに加え特設ニュースで気象解説を行い、防災・減災報道に努めた。15年度に統いて、予報画面の更新や新規開発に努め、画面の見やすさ、分かりやすさを追求した。気象情報の演出面の刷新も進め、『ニュース7』ではほぼ毎日、フルバーチャルセットで気象解説を実施したほか、正午前や午後7時前などの気象情報のテーマ音楽を16年ぶりに新作した。

VII. スポーツ

1. リオデジャネイロ オリンピック・パラリンピック

南米大陸初のオリンピックとなったリオデジャネイロ大会は、205の国と地域のほか、個人の資格での参加者と難民選手団の選手、合わせて1万人余りが参加。日本時間8月6日から22日までの17日間にわたり、28競技306種目で熱戦が繰り広げられた。大会は日本選手のメダルラッシュとなり、金12、銀8、銅21の計41個を獲得。前回ロンドン大会の38個を上回り、過去最多となった。

現地との時差は昼夜逆転の12時間。総合テレビは、競技が行われる午後10時から翌日昼にかけての時間帯に「中継枠」を編成。日本選手の活躍や現地の熱気をライブで伝えた。午後6時～8時台には『ニュース7』を挟んで「ハイライト枠」を設け、生中継を見逃しても「日本選手の活躍をまとめてチェックできる」「このあとどの見どころがすぐに分かる」放送を目指した。

BS1は、地上波で放送しない種目などを中継で伝えるとともに、現地で競技が行われていない午後から夜にかけての時間帯を「見逃し・録画ゾーン」とし1日約22時間、28競技すべてを放送した。

8Kでは開閉会式をはじめ競泳、バスケットボール、柔道、陸上、サッカーを制作し、スーパーハイビジョン試験放送で中継または録画中継で放送した。

デジタルでは14年の放送法改正以降初となる今大会において、インターネットを中心に独自のサービスを実施した。特設ホームページやアプリを通じ、テレビ放送されていないものも含めすべての競技映像を配信。ライブまたは見逃しでの総配信時間は3,293時間に及んだ。また、約400本のハイライト動画を制作し、特設ホームページのみならず「YouTube」のNHK公式チャンネルでも公開、幅広い世代に見られた。また、中継番組をネットで配信するインターネット同時配信実験（試験的提供A）を毎日実施。総配信時間は49時間27分、総訪問者数は67.7万人であった。このほか8K中継映像を4Kに変換し、ハイブリッドキャストやNHKオンデマンドで提供する実験的な取り組みも行った。データ放送では日本選手の結果を中心に放送した。

オリンピックに続き、リオデジャネイロパラリンピックが日本時間9月8日から19日までの12日

間、159の国と地域から4,400人余りの選手が参加して行われた。日本はロンドン大会の16個を上回る24個のメダルを獲得。しかし夏の大会では初参加の64年の東京大会以降、初めて金メダルなしに終わった。

総合テレビでは初めて大会期間中の毎日、競技のもようを生中継し、夜10時台には「ハイライト番組」を放送した。さらにEテレの夜8時台では、視覚や聴覚に障害のある人に向けた「ユニバーサル放送」を行い、スタジオの手話キャスターや字幕放送、解説放送を通じ、パラリンピック競技を分かりやすく伝えた。

テレビの放送時間は、生中継の74時間を含め、合計133時間余りと、前回ロンドン大会の45時間余りを3倍近く上回り、過去最長となった。

デジタルでも、ホストが制作した中継映像について、すべてインターネットで配信。総配信時間は786時間であった。データ放送でも五輪同様のサービスを実施した。

〔リオデジャネイロ五輪・8K〕

リオデジャネイロオリンピックでの8K制作は、OBS（オリンピック放送機構）との共同制作で、2台の中継車による中継制作と8K・ENGクルーによるロケを行った。

中継制作は、閉会式、競泳、柔道、陸上、バスケットボール、サッカーで計約72時間を制作。

8月1日から始まった「8K試験放送」でライブ、及び録画放送を実施した。

ENGロケでは、ビーチバレーやアーチェリー、リオの街の雰囲などを撮影し、短いパッケージを作成した。

リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック放送時間量

	オリンピック	パラリンピック
総合	254時間55分	100時間41分
Eテレ	17時間51分	12時間5分
BS1	354時間11分	20時間58分
BSP		
R1（一部FM）	109時間35分	21時間48分
合計	736時間32分	155時間32分
スーパーハイビジョン (試験放送)	150時間56分	(放送なし)

2. サッカー

〔Jリーグ〕

15年に引き続き、2ステージ制とチャンピオンシップ方式が採用されたJリーグでは、年間勝点

で3位だった「鹿島アントラーズ」がチャンピオンシップを制し、7年ぶりの優勝を飾った。

チャンピオンシップの是非については大きな議論が行われ、17年からの廃止が決まり、17年シーズンからは1ステージ制に戻ることになった。

BS1では、J1・J2合わせて合計38試合を放送（4月16日「鳥栖－神戸」は熊本での地震の影響で中止となり、放送も取りやめた。また、リオデジャネイロ五輪期間中はJリーグも放送を休止した）。

総合テレビでは、J1開幕や優勝争い、チャンピオンシップなど合計7試合を放送。NHK地方局によるローカル放送はJ1・J2・J3を合わせ、延べ44試合だった。

〔天皇杯〕

NHKが96年から共催する天皇杯全日本サッカー選手権の決勝は、56大会ぶりに大阪で開催され（吹田スタジアム）、鹿島がJリーグとの二冠を達成した。

1回戦から準々決勝までの計11試合をBS1で、準決勝・決勝の3試合をGとR1で放送した。

〔皇后杯〕

皇后杯全日本女子サッカー選手権は、3回戦から決勝までの計6試合をBS1で放送した。

〔FIFAワールドカップ2018予選ほか〕

ワールドカップのアジア最終予選が9月1日から始まり、BS1で日本戦の全試合を放送した。

最終予選は12チームが2つのグループに分け、9月1日から17年9月5日までおよそ1年をかけ、6チームによるホーム＆アウェー方式の総当たり戦で行われる。上位2位までに18年のW杯出場権が与えられ、3位チームはプレーオフに回る。

9月に行われたAFC U-16選手権（インド）、10月のAFC U-19選手権（バーレーン）に出場した日本代表チームは、それぞれ、ベスト4、優勝と好成績を収め、17年に行われる年代別のW杯出場を決めた。いずれも20年東京五輪の出場資格を持つ選手たちでもあり、BS1で日本戦全試合を録画放送した。

アジアのクラブチームナンバーワンを決めるAFCチャンピオンズリーグには、日本から4チーム（広島、ガンバ大阪、浦和、FC東京）が参加したものの、いずれも準々決勝に進めなかった。

BS1では準決勝、決勝の合計3試合を録画放送した。

3. 野球

プロ野球はセ・リーグでは「広島カープ」が25年ぶり7回目、パ・リーグでは「日本ハム」が4

年ぶり7回目の優勝を果たした。日本シリーズは、4勝2敗で「日本ハム」が制し、10年ぶり3回目の日本一に輝いた。

広島がリーグ優勝を決めた9月10日の巨人戦（東京ドーム）は、総合テレビで生中継。また、日本ハムがリーグ優勝を決めた9月28日の西武戦（西武プリンスドーム）もBS1で生中継し、セパともにリーグ優勝の瞬間を伝えることができた。

16シーズンは、レギュラーシーズンを地上波・BS1合わせて109試合、クライマックスシリーズをBS1で6試合、日本シリーズをBS1で2試合放送。シーズン合計117試合の放送を行った。

17シーズンは、球場周辺も含めた「ボールパーク感」を出すことにこだわって放送した。球場外野席に完成した観覧車からの中継をはじめ、球団マスコットキャラクターに生でカメラ撮影を依頼するなど、従来の野球中継ではやってこなかった演出を実施。

また、6月には『ゆる～く深く！プロ野球』と題した新たな演出番組の第2弾を放送。BS101chでは通常の野球放送を、102chはスタジオにゲストや解説者を招いて、ふだんの中継では見れない、聞けないあれこれにとことんこだわって放送した。ツイッターやメールでの質問・意見も募集したところ、大きな反響があった。

映像面では高性能の8倍速スローVTRを積極的に活用し、高度なプロの技に迫った。

さらに、画面上でネクストバッターや投手の球数を表示するように改良。加えてこれまで球場によってバラバラだった投球スピードの表示を統一するなど「分かりやすさ、見やすさ」にもこだわった。

4. 大リーグ

2016シーズンはレギュラーシーズン200試合、ポストシーズン31試合、オールスター GAME 1 試合を放送。うち総合テレビでは13試合を中継した。レギュラーシーズンでは「ヤンkees」田中将大、「レンジャーズ」のダルビッシュ有、「マリナーズ」岩隈久志、新加入の「ドジャース」前田健太の登板試合を中心に放送。「マーリンズ」のイチローはメジャー通算3,000本安打を達成、記録までの道のりを連日生中継した。また、ワールドシリーズは「カブス」の劇的な108年ぶり優勝を伝えた。

5. ATPテニスツアー

16年のATPテニス中継は世界を転戦して9大

会行われるマスターズ1000とその獲得ポイント上位8人のみが出場できるパークレイズATPワールドツアーファイナル～ロンドン～の計10大会を放送。このうち4大会を現地から、6大会を東京のスタジオから日本のエース・錦織圭選手の試合を中心に合計75試合（15年に比べ3試合のマイナス）を生中継した。再放送も含めた総放送時間は1万5,956分（15年に比べ2,263分のマイナス）であった。

錦織選手は16年のシーズン、決勝に2回（3月のマイアミオープン、7月のロジャーズカップ）ベスト4に3回（5月のムチュア マドリードオープン、BNLイタリア国際～ローマ～、11月のパークレイズATPワールドツアーファイナル～ロンドン～）進出を果たした。悲願のマスターズ1000初優勝に向けて、今後の活躍が期待される。

6. 大相撲

年6場所90日間の本場所をGTV、BS102ch（サブチャンネル）、R1で放送。幕内の時間には、副音声で英語放送を、総合テレビでは、生字幕放送を実施した。また、ハイライト番組では、総合テレビで放送している『大相撲 幕内の全取組』に加え、新たに国際放送のNHKワールドで、7月から『GRAND SUMO Highlights』を放送開始。海外の視聴者から好評を得ている。

16年度は5人が優勝する混戦となった。5月の夏場所では、白鵬が全勝で優勝回数を37回に伸ばした。7月の名古屋場所では、日馬富士が8回目の優勝。そして9月の秋場所では、角番の大関・豪栄道が15戦全勝で初優勝を果たした。続く11月の九州場所では、鶴竜が7場所ぶり3回目の賜盃を抱いた。17年1月の初場所では、大関・稀勢の里が14勝1敗で初優勝。稀勢の里は初場所後、72代横綱に昇進。若乃花以来、19年ぶりに日本出身横綱の誕生となった。稀勢の里は新横綱として迎えた春場所で初日から12連勝するが、13日目に左上腕部を負傷。優勝は絶望的と思われたが強硬出場し、千秋楽で大関・照ノ富士との本割、優勝決定戦で連勝。相撲史に残る逆転劇で、2場所連続優勝を果たした。

7. ゴルフ

81回目を数えた日本オープンは埼玉県の狭山ゴルフクラブで開催された。

アメリカPGAでも活躍する松山英樹が、プロとして初めて日本オープンに出場し注目された。

試合は、その松山が3日に首位に立つと、最

終日も格の違いを見せて後続を突き放し、初優勝を果たした。

日本女子オープンは栃木県の烏山城カントリークラブで開かれた。アメリカLPGAで活躍し、15年の日本女子オープン覇者のチョン・インジをはじめ、宮里美香やアマチュア勢ら、世界トップ選手が参戦した。その中、最終日は優勝経験のない堀琴音とアマチュアの畠岡奈紗との優勝争いとなる。14番で並んだ二人だが、畠岡が最終18番でバーディーを奪い先にフィニッシュ、そのまま優勝をし、初めてのアマチュア優勝と共に17歳263日で史上最年少優勝記録も更新した。

日本シニアオープンは、千葉県の習志野カントリークラブで行われた。タイ出身のプラヤド・マークセンと鈴木亨との一騎打ちとなったが、結局マークセンが大接戦を制し初優勝を果たした。

8. Bリーグ

バスケットボールの国内の二つの男子リーグが一つになって16年に開幕した国内最高峰のプロバスケットボールリーグ、Bリーグ。

9月22日、それぞれのリーグを代表するチーム「アルバルク東京」対「琉球ゴールデンキングス」が対戦した開幕戦をBS1で放送した。日本で初めてLEDで作られたコートや派手なオープニング、ハーフタイムのショーは大きな話題となった。16年度は、全中はBS1でレギュラーシーズン17試合とオールスターゲームを生中継し、ローカルでは各局（地域）の地上波で計13試合を放送。元NBAプレイヤーの田臥勇太選手や富樫勇樹選手など国内最高レベルのプレイヤーたちの華麗なプレーを伝えることにより、Bリーグを国内で広く根づかせる一翼を担った。

また、3月11日の「アルバルク東京」対「大阪エヴェッサ」戦ではNHKで初となる4Kの生中継を成功させ、来るスーパーハイビジョン時代に向けて貢献した。

2020年東京オリンピック・パラリンピック準備状況

20年に開催される東京大会の放送・サービスの円滑な実施に向けて、NHKの総力を結集する必要があることから、16年10月、「2020東京オリンピック・パラリンピック実施本部」が設置された。19人体制でスタート、記者・PD・技術・放送管理など職種はさまざま、それぞれの経験と知見を生かして多方面にわたる準備、交渉、調整などを進めている。

16年度は主に、放送・サービスの具体的な項目を記載した基本計画（案）の作成をはじめ「インターネットを活用した新たなサービス」「障害者スポーツの理解促進につながる新しい演出」など、東京大会を見据えてリオ大会で試行する施策を、関係部局と連携して行った。

また、全局体制構築を目指して本部各部局・拠点局を対象に基本計画（案）等の説明会を実施。さらに最新技術の開発・活用、リオ大会後に始まった関連番組の開発・サポート、「オールNHK」で取り組むプロモーション等の全国展開を始めた。

情報番組

I. 経済・社会情報番組

すさまじいスピードで技術革新が進み、これまで当たり前と信じて疑わなかった価値観が揺らぎ、社会を二分するような構図も生まれつつある。その中で、経済・社会情報番組部は16年度も時代と向き合い、混迷の中を生き抜く道標となる番組を放送し続けた。

(1) 定時番組

16年度は『クローズアップ現代+』『サキどり』『週刊 ニュース深読み』『プロフェッショナル仕事の流儀』『ドキュメント72時間』『ファミリーヒストリー』（以上、他部局との共管番組含む）の6番組を定時番組として担当した。総合テレビの平日夜間を中心に大規模な改定に伴い、多くの番組で放送時間帯の移設、ブラッシュアップを行った。また、『NHKスペシャル』などの特集番組に加えて、定時化を目指す開発番組『ノーナレ』を制作した。

『クローズアップ現代』は、16年4月より『クローズアップ現代+』として放送時間帯を夜10時台に移設。専門性と個性豊かな7人のキャスターを起用、バーチャル画面なども活用しながら親しみやすさを前面にワンテーマで社会を掘り下げた。「都心の不動産バブル」や「ATM不正引出事件」「高額チケット転売」「相続トラブル」など、特に身近なマネーの話題を継続的に取り上げた。さらに、報道局などとも連携して「シリア空爆」や「北朝鮮の脅威」といった世界的な課題に正面から取り組んだり、「コンビニ店長の過労」「サービス業の過剰業務」といった長時間“勤務”体质への問題提起を行った。また、「人気映画のメガヒットの秘密」「最新の糖質制限」「地球外生命の

探求」「日本産ワインブーム」など現役世代の視聴者の関心が高い話題をバリエーション豊かに取り上げ、番組枠の新しいカラーを打ち出した。

『プロフェッショナル 仕事の流儀』は、あらゆる分野で活躍する一流の“プロ”的仕事を徹底的に掘り下げるドキュメンタリー番組。16年度は、脚本家・倉本聰、プロサッカー監督・森保一、経営者・川上量生など各界のトップランナーをはじめ、「地方公務員」「鮮魚店」「保育士」など暮らしを支える巷のプロをフィーチャー。身近な職業を通して、仕事の奥深さと哲学を伝えた。16年度から73分特別版をスタート。「ロボット開発者」「スーパー高校生」「世界遺産」など、夜7時半から家族で楽しめるドキュメンタリー7本を制作した。

また、番組公式アプリを制作、17年3月末で170万ダウンロードに達し、日本賞最優秀賞をはじめ、ACC賞やMM総研大賞などを受賞した。番組とも連動、一般公募で集った18歳のアプリ利用者がプロに弟子入りする過程をリアリティーショーの手法で73分特別版を放送した。

『サキどり』は、11年に放送を開始してキャスターのジョン・カビラ氏と共に、震災後の不確実な時代をたくましく生きるためにヒントを6年間にわたって発信し続けてきた。最終回の放送は17年3月26日。16年度は日本が人口減少社会を迎えてさまざまな課題に直面するなか、課題解決型番組としてリニューアル。商店街の活性化や町並み保存、団地再生、島の医療など課題に取り組む人々や集団を密着ドキュメント。試行錯誤の現場を徹底追跡することで、日本社会が今後進むべき道筋を探った。

『ドキュメント72時間』は、一つの場所に3日間密着し、そこを行き交う人々の人間模様や知られざるドラマを記録するドキュメンタリー番組。四国小さな海辺の駅、名古屋のレトロ喫茶店、震災後の熊本の動物園など全国各地の人々のリアルな暮らしを切り取った。16年度は全国13の放送局が制作に参加した。また、海外を舞台に『72時間』を制作、リオ五輪に沸くブラジルと返還から20年になる香港にカメラを据えた。また、ネットオークションや福島飯館村の選挙の投票箱などこれまでにない視点で“場”を設定、北アルプスの涸沢を舞台にした放送では番組と連動してVR動画の先行配信も行った。

『ファミリーヒストリー』は、著名人の家族の歴史を取材し、本人も知らないルーツに迫る番組。1本のスプーンに秘められた「ケンドーコバヤ

シ」の祖父の旧ソ連での抑留生活、朝鮮半島に渡ったミュージシャン「財津和夫」の祖父の決意と終戦直後の半島からの引き揚げの姿。73分拡大版では、「北野武」の謎だった母の幼少期や徳島にあった父方のルーツが明らかになった。そして、行方が分からなかった親戚が100年以上の時を経て見つかった「大竹しのぶ」など、翻弄されながらも力強く生きた人々の「家族の絆」を描いた。

(2) 特集番組

経済・社会情報番組部では、ジャーナリストイックな切り口で、ドキュメンタリーやバラエティーなど多彩な特集番組を制作した。

『NHKスペシャル』「マネー・ワールド 資本主義の未来」3本シリーズの第2集「国家VS.超巨大企業～富をめぐる攻防～」を制作。爆笑問題をスタジオプレザンターに起用、資本主義の変調の兆しを世界の最前線に取材した。今や国をしおぐ富を蓄える巨大企業が登場、企業が国家を訴える裁判が多発して財政難に陥る国も出てきている中、経済を誰がコントロールするのかを考えた。

『NHKスペシャル』「自閉症の君が教えてくれたこと」は、自閉症の作家・東田直樹さんと自閉症の息子を持つイギリス人作家デビッド・ミッチャエルさんの交流を描いた特集番組（14年放送）の続編として制作。闘病を経験したディレクターが主人公に正面から向き合い、生きることの意味を問うた。

『NHKスペシャル』「活断層の村の苦闘」では、熊本地震直後から追い続けてきた西原村民の復興への半年にわたる苦闘ぶりを丁寧に取材、現状の課題と希望を広く伝えた。また、6月のイギリスのEU離脱や、7月に発生した相模原障害者施設での大量殺傷事件では、報道局などと連携して

『NHKスペシャル』を制作、事件・事故、国際的関心事に即応、視聴者の安心・安全を守るべく、必要な情報を届けた。

また、定時番組からさまざまな特集番組に展開。『NHKスペシャル』「“がん治療革命”が始まった～プレシジョン・メディシンの衝撃～」は、『サキどり』で取り上げた、がん細胞の遺伝子を解析で最適な治療薬を探し出す「精密医療」の最前線を継続取材。日米のがん患者と医療機関の奮闘を通して、新たな治療法の可能性と課題を見つめた。

『プロフェッショナル 仕事の流儀』の長期取材から『NHKスペシャル』「終わらない人 宮崎駿」をプロデュース。世界的アニメーション映画監督の宮崎駿さんが、引退後、新たなアニメ制作に格闘する姿を独占密着した。

開発番組として、ナレーションを排して取材対象に迫る新たなドキュメンタリー『ノーナレ』を制作。12月は北陸の寿司職人、3月には現役引退で注目を集めめた棋士“ひふみん”こと加藤一二三九段に密着した。また、15年度に引き続き、スタンダードから外れた一風変わった数々の“その他”を全国に求めるバラエティー『魅惑のソノタ』を2本制作、総合夜間の新たな定時番組の開発を目指した。

II. 生活・食料番組

生活・食料番組部は、現代社会のさまざまなテーマを「生活者の視点」から見つめ、視聴者の関心や疑問に答える情報番組を作成した。

16年度は、月～金曜朝の『あさイチ』、月～水曜昼の『ひるブラ』、木曜夜の『所さん！大変ですよ』、日曜朝の『うまいッ！』を定時番組として放送した。

(1) 定時番組

『あさイチ』は、視聴者が“一番欲しい”“もっと知りたい”と考える情報がたっぷり詰まった、“市場”的な活気ある番組。主なターゲットは家庭を守る主婦。長引く不況やセーフティネットの綻びによるかつてない不安な時代を賢く生きていくための「信頼できる情報」を、7年目も、いち早く家庭に届けた。社会問題、政治の話題からエンタメ、生活実用情報までを、ニュースとはひと味違う「生活者の視点」から掘り下げて伝えた。また、視聴者からの質問や意見をファックスやメールで受け付け、生放送の中で積極的に紹介。番組は視聴者の身近な存在となることに努めた。

中継番組『ひるブラ』は「行ってみたい！」「見てみたい！」「食べてみたい！」四季折々の姿を見せる全国各地の“旬”な場所を訪ね、その地域の魅力を生中継でダイレクトに届けた。東京のスタジオ出演者が画面の小窓で登場し、率直な質問や反応を投げかける演出スタイルで放送した。

『所さん！大変ですよ』は、社会の片隅で起きていた“不思議な事件”を深掘りし、意外な真相をあぶり出す情報番組として定着。16年度から午後8時台に放送時間を移し、ディレクターが体当たりで取材する演出スタイルを行い、より幅広い層にコミットすると目指した。

『うまいッ！』は“うまいッ！”と思わず言ってしまうような日本各地の絶品食材をテーマに、おいしいものを届けたいと奮闘する生産者に密

着。味を極める技や工夫を伝えるとともに、健康効果や歴史文化などのうんちく、とっておきの調理法を紹介。多角的に食材の魅力を描き、食を支える人々と産地を応援する番組として好評を得た。

6年目を迎えた『サラメシ』は、取材を希望する視聴者からの投稿がコンスタントに来ており、「サラリーマンの昼メシを通して日本の今が見える」ユニークな番組として多くのファンをつかもうとしている。

(2) 特集番組

朝の情報番組『あさイチ』では、東日本大震災直後から被災地応援の一環として、16年度もリポーターで俳優の篠山輝信さん（通称アッキー）が現地を訪ねる『バスで！列車で！アッキーがゆく“復興の地”』（G、3.11/BSP、3.4）で放送。継続して訪ねていることもあり、震災6年の日に被災地との等身大のつながりについて深く考える企画となり好評を得た。また、『あさイチ』のキャスター3人が、子どもたちの願いを叶える『おねがい！あさイチ』を2本放送（8.21、11.3）。福島県の仮設住宅で夏祭りを盛り上げたいという中学生や、熊本地震で傷ついた地元の人たちを歌で元気づけたいという高校生をサポート。子どもたちが頑張る姿が感動を呼んだ。20年のオリンピック・パラリンピック東京大会関連では『あさイチ』「おトクの祭典！ぼちボチまつり」（10.10）を放送。視聴者が参加できる双方向システムを使い、準備中の今しか見られない絶景や、大会エンブレムの秘密、スポーツクライミング日本代表の愛称投票などを行った。『大河ドラマ』「真田丸」とコラボした『あさイチ×真田丸 最終回直前SP』（12.18）では、堺雅人による爆笑撮影秘話やテーマ音楽を担当した辻井伸行さんと三浦文彰さんの豪華生演奏など、家族で楽しめるエンターテインメント番組とした。

ネット連動型の生放送『おやすみ日本 眠いいね 第13弾 モヤモヤ18歳SP』（6.19）は、NHKの18歳応援プロジェクト「ムズムズエイティーン」とコラボ。全国から寄せられた“青春のムズムズ”を紹介するなどし、目標値の2,018万眠いいね！を達成した。

『「とと姉ちゃん」と、あの雑誌』（7.18）では、『連続テレビ小説』『とと姉ちゃん』のモチーフにもなった、雑誌『暮らしの手帖』と大橋鎮子、花森安治を描き、「女性の暮らしを良くする」ことを考えた独自の視点と徹底ぶりについて、2人の言葉や当時の編集部員のインタビュー、愛読者の声を交えて構成し大きな反響を得た。

『シンデレラ・テクノロジー』(7.30)では、自宅にいる10人のスッピン女性とスタジオを、ネットの電話会議システムで接続。メイク動画で人気の女性が、渋谷のスタジオから女性たちにキレイになる技を直接指導するデジタル・ワークショップの演出を取り入れ、斬新な番組を目指した。

『はに丸ジャーナル』「リオ五輪直前SP」(8.3)は、キャラクター・はに丸が、オリンピック直前に選手たちを苦しめる「プレッシャー」という“魔物”的正体とその体への影響について分析。日本中の“期待”をあおるマスコミにも取材。現代の社会で不思議に切り込む情報バラエティー番組として放送した。

4月から始まった「くう・ねる・あそぶ」子どもプロジェクトの第一弾として『くうねるあそぶ こども応援宣言』「こどもごはん」(E, 4.1)を放送。自分のごはんについて、子どもたちはどう感じているのか？貧困による空腹の影響はどうなのか？など、ごはんを通して聞こえてくる子どもたちのリアルな声にしっかり耳を傾け、大人たちが今できることを考えた。

III. 科学・環境番組

科学・環境番組部は、総合テレビ・Eテレ・BSプレミアムで12タイトルの定時番組と『NHKスペシャル』18本など数多くの特集番組を制作。「科学報道」「科学ロマン」「生活科学」を3本柱として、先端技術、医学、宇宙、自然、健康、食品などの最新情報を科学的な視点で分かりやすく伝えた。4月に発生した熊本地震や東日本大震災関連番組にも取り組み、地震や原発事故について科学の切り口で検証し、リスクに強い社会の構築に取り組んだ。

(1) 定時番組

放送開始から22年目を迎えた『ためしてガッテン』を全面リニューアルした『ガッテン！』を放送開始。ほかにも、11年目を迎えた『ダーウィンが来た！生きもの新伝説』、14年目を迎えたEテレ『サイエンスZERO』、2年目を迎えたBSプレミアム『コズミック フロント☆NEXT』などを放送した。

①総合テレビ

新番組『ガッテン！』では、「毛細血管ケアSP」「糖質制限ダイエットの落とし穴」などのタイムリーな医学・健康情報や「おろし器」夢調理SP」「トマト選び自由自在ワザ」など身近な生活の知恵を分かりやすく伝えた。

『ダーウィンが来た！生きもの新伝説』では、「たてがみを捨てたライオン」「里山の珍魚ドジョウ」など、国内外で大自然のスクープ映像の撮影に成功。また、身近な生き物の意外な生態を捉えた「秘密のネコワールド」や、生命史に挑んだシリーズ「よみがえれ！恐竜」を制作した。

新番組『クローズアップ現代+』では、地球外生命、自然災害など幅広いテーマで7本制作。「あなたの脳を改造する！？／超・映像体験」「進化する人工知能 ついに芸術まで！？」等では最先端の科学技術を取り上げた他、ノーベル医学・生理学賞受賞などタイムリーな報道にも取り組んだ。

②Eテレ

日本唯一のウイークリー本格科学番組『サイエンスZERO』では「アンドロイド研究最前線」「海底に眠る巨大鉱床！」など、専門的な科学情報を深く掘り下げ分かりやすく伝えた。また、「最新報告 チェルノブイリと福島」などで原発問題にも取り組んだ。

③BSプレミアム

『コズミック フロント☆NEXT』は、4K一体化制作を積極的に実施するなど、高品質の映像と高精細CGを駆使し、宇宙を巡るさまざまなミステリーを解き明かした。「ブラックホールの意外な素顔」「恐竜絶滅 頃石説の真相」など、最新の研究に基づき知られざる物語に迫った。

『ワイルドライフ』は、4K一体化制作を一部で実施、「南太平洋ポリネシア サメ大集結！」「白山連峰の四季 ニホンカモシカ」など、ダイナミックな国内外の自然を記録した。

(2) 特集番組

16年度の特集番組は『NHKスペシャル』を18本放送。15年度に放送したものも含め、国内外の映像祭で科学番組の受賞が続いた。「被曝の森～原発事故 5年目の記録～」が文化庁芸術祭賞テレビ・ドキュメンタリー部門優秀賞、「天使か悪魔か 羽生善治 人工知能を探る」が科学技術映像祭 研究開発部門 文部科学大臣賞を受賞するなどした。

4月に発生した熊本地震については、「緊急報告 熊本地震 活断層の脅威」「“連鎖”大地震緊迫の10日 いのちを守るために」を放送。最新情報をいち早く伝え減災報道に尽力した。また、巨大災害 MEGA DISASTER II「地震列島 見えてきた新たなリスク」、MEGA CRISIS 巨大危機「地震予測に挑む」「地震大火災」があなたを襲うで、巨大災害とその対策の最前線に迫った。

原発事故については、廃炉への道2016「核燃料

デブリ 迫られる決断」、メルトダウンFile. 6 「原子炉冷却 12日間の深層」で事故検証と処理の課題を追った。

また、シリーズ キラーストレス、「血糖値スパイク」が危ない」「がん治療革命」が始まった」で、日進月歩で常識が変わる医療の最前線を伝えた。

自然分野では、シリーズ ディープ・オーシャン「潜入！深海大峡谷 光る生物たちの王国」、プラネットアースⅡ「プロローグ」および全3集、「森の王者 ツキノワグマ」を制作した。

この他、シリーズ古代遺跡透視「プロローグ・大ピラミッド 永遠の謎に挑む」で最新技術を駆使し古代遺跡のミステリーに迫った。

総合テレビの特集では、『チンパンジー アイたちが教えてくれた』『SFリアル』『サイバー戦争の世紀』、『珍獣と暮らしてみないか』、『NHKスペシャル』『足元の小宇宙Ⅱ 絵本作家と見つける“雑草”生命のドラマ』、『へんてこ生物アカデミー』などを制作。『忍たま乱太郎の宇宙大冒険 with コズミックフロントNEXT』では15年度に続き4K制作でアニメーションと宇宙映像を融合させ、大型展示映像への展開を進めた。BSでは、国際展開を視野に入れて『NHKスペシャル』を再編した『シリーズ医療革命』や、『美と若さの新常識～カラダのヒミツ シーズン2』などを制作した。

また、試験放送が8月に始まったスーパーハイビジョンでは、『被曝の森～原発事故5年目の記録～』『残響の街・長崎～福山雅治 故郷を撮る～』などを制作した。

科学イベント「ロボットコンテスト」は、大学ロボコンについては8月にタイで開催された『ABUアジア・太平洋ロボコン』を9月に放送。29回目を迎えた『高専ロボコン』は11月に両国国技館で全国大会が開催され、12月に放送。ライブストリーミングも実施し、成功を収めた。また、12月に日本科学未来館で開催された「NHKサイエンススタジアム2016」では、NHKの科学番組が集結し、公開収録・展示を実施、過去最多となる約3.3万人の来場者を集めた。

教育番組

I. 青少年・教育番組

青少年・教育番組部は、幼児から青少年までの若い世代に向けて、楽しみながら豊かな情操を育

むことのできる学校放送番組や若者向け番組、さらにファミリー向け番組を制作した。

いずれのジャンルでもテレビ・パソコン・モバイルを連動させた番組開発に積極的に取り組み、本格的な多メディア時代にふさわしいサービスを提供した。

(1) 幼児向け番組

16年度は、定時の新番組として音楽バラエティー『コレナンデ商会』をスタートさせた。また、朝7時台には『シャキーン！』『アニメ はなかっぱ』『コレナンデ商会』の3番組が連動して新たにデータ放送を開始した。参加者が3番組共通のポイントを獲得できるなど、番組の枠を超えた演出を行った。自然科学番組『ミミクリーズ』では、番組の国際展開を目指し、初めて国際共同制作（タイPBS）を行った。

(2) こども番組

小学生を対象とした『Let's天才てれびくん』は14年度からデータ放送の機能を使って子どもがより積極的に番組に参加できるスタイルを追求してきた。16年度はその集大成の年度としてストーリーの強化と、データ放送のゲーム刷新に取り組んだ。また、年間4回の公開生放送を実施。2月の生放送では、データ放送参加者数が過去最高の14万6,000人を記録した。さらに、14年度に比べて非常に見られた15年度と同様、ターゲット層の子どもによく見られた。『ビットワールド』も、年間6回の生放送でPC／スマホのウェブゲームとデータ放送を組み合わせた双方企画を積極的に行なった。2月、3月の生放送ではデータ放送やスマホでの参加者数が共に10万人を超えて安定した人気を見せた。

(3) 若者向け番組

『Rの法則』はモニター調査から浮かび上がった10代女子のリアルな声を踏まえて、テーマの多様化や演出の細かい改革に取り組んだ。ホームページのリニューアル、出演者参加のイベント開催（年間3回）なども功を奏して、15年度を上回って、ターゲット層の女子によく見られた。『人生デザイン U-29』は全国各地の若者の新しい生き方や人生の選択を伝えた。収入から悩みまで主人公のリアルな姿を描き、キャリア形成へのヒントを提供した。

(4) ファミリー向け番組

家族に向けたニュース解説番組『週刊 ニュース深読み』は、16年度も多岐にわたるテーマに挑戦し、視聴者の関心に寄り添って分かりやすく伝えた。現役の保護者たちが子育ての悩みを語り合

う『ウワサの保護者会』は、身近な悩みだけでなく「アクティブ・ラーニング」など情報性の高いテーマも扱い、番組の幅を広げた。『福島をずっと見ているTV』は被災地の現在の姿を地道に描き続け、意識の風化防止に取り組んだ。10月からは新番組『ねほりんぱほりん』がスタート。顔出し不可のゲストが人形の姿で登場し、赤裸々な裏話を聞く演出が話題となった。

(5) 特集番組

5月に開発番組『むちむち！』をEテレで放送。若者が未知の世界を訪ね、実体験する姿を追った。この演出を発展させ、2月には『みちたび！』を放送。出演者のトークをインターネットでも配信し、テレビ離れが進む若い世代の視聴を誘導する取り組みを行った。

10月には開発番組『香川照之の昆虫すごいぜ！』をEテレで放送。トノサマバッタの魅力を出演者が体を張って伝え、親子で楽しめる番組となつた。

大みそかには『しあわせニュース2016おおみそか』を総合テレビで生放送。全国各局から寄せられた心温まる話題をお茶の間に届けた。

3月には開発番組『ろんぶ~ん』をEテレで放送。学術論文を題材に、知の世界の奥深さを楽しむ新しいバラエティー番組を目指した。

このほか『Rの法則』『週刊 ニュース深読み』などが放送時間を拡大するなどして特集番組を作成、定時番組をさらにパワーアップし番組ファンに届けた。

II. 学校教育番組

16年度は、学習指導要領改訂に向けての動きが本格化する中、専科でない先生が教える実技教科、教室へのタブレット導入に伴う新しい調べ学習など、教育現場の新しいニーズに応える番組を新設した。また、放送法の改正に伴い、教育ポータル「NHK for School」のさらなる充実に努めた。全国の公立小中学校の教室でICTを活用した教育の情報化が進められる中、タブレットなどでより動画が見やすくなるアプリをリリースし、普及のための取り組みを行った。

(1) 定時番組

学校教育番組として54番組（幼稚園・保育所向けテレビ6、小学校向けテレビ34、中学校・高等学校向けテレビ14）を放送した。

新番組としては、幼稚園・保育所、小学1年生向けの特別活動・生活科番組『でーきた』、小学5

～6年生向けの家庭科番組『カティカ』、小学5～6年生、中学生、高校生向けの技術科番組『10min.ボックス テイクテック』、小学4～6年生、中学生向けの総合・情報教育科番組『しまった！～情報活用スキルアップ～』、中学生、高校生向け社会科番組『10min.ボックス 生活・公共』を放送した。

(2) 特集番組

NHK全国学校音楽コンクール関連として『発表！Nコン2016課題曲』、『スーパー合唱教室2016』「高等学校の部」などを放送したほか、NHKのさまざまな番組とコラボするなどして、10月の全国大会に向けて多面的な展開を図った。

また、「NHK杯全国放送コンテスト」関連として『ティーンズビデオ』『ティーンズラジオ』で優秀な作品を紹介した。

さらに、昔話を題材に裁判員裁判を疑似体験できる『昔話法廷』を15年度に統いて3本新作し、Eテレで放送。前回に続き大きな反響を呼んだ。

また、プログラミング教育番組として15年度に開発した『Why！？プログラミング』を16年度に6本新作。アメリカの研究機関MITメディアラボとの連携の下、子どもたちが実際に作品を作成したり掲載したりできる環境をサイトに整備し、多数のアクセスを得た。

10月と3月には『いじめをノックアウト』を核に『いじめをノックアウトスペシャル』を生放送。若者、親、教師がいじめについて討論する“かたり場”を新たに企画し、生放送中に約4,000件の投稿を集めた。いじめに対する決意表明「行動宣言」への参加者は累計148万人を突破した。

また、日本人が見過ごしている日本の魅力を、スタイリッシュな映像表現と共に掘り下げる『JAPANGLE』を4本制作しEテレで放送。英語版も制作しNHKワールドで放送した。

このほか、全国の小学校60チームの頂点を決める『なわとびかっこび王選手権2016』など多数の特集番組を放送した。

(3) 教育イベント関連

①「第67回放送教育研究会全国大会」（11月18～19日）は、東京都で開かれた。「体感！！アクティブ・ラーニングに向けたICT活用のツボ！」をテーマに、授業における、特にタブレット端末を使った「NHK for School」の利用のしかたについて、ワークショップや活発な議論が展開された。

②「第83回NHK全国学校音楽コンクール」には、小・中・高合わせて2,564校、約10万人が参加した。NHKホールで行われた「全国コンクー

ル」(10月8～10日)では小学校・中学校・高等学校の部を生放送した。

③「第63回NHK杯全国高校放送コンテスト」には地方予選を含め、全部門合わせて1,664校が参加した。

④「第33回NHK杯全国中学校放送コンテスト」には地方予選を含め、全部門合わせて649校が参加した。

⑤「NHK for School ICT活用講座」を全国8か所で開催し、「NHK for School」の番組とウェブコンテンツの活用方法を学ぶ、体験型の講座を提供した。そのほか、専門の担当者が学校現場などで「NHK for School」の活用法を紹介する研修として「NHK for School基礎セミナー」を、35回実施した。

(4) 学校教育関連委員会

①教育放送企画検討会議(年2回／7月、12月)

全国各ブロックからの意見を集約して番組計画を立案したうえで、学識経験者、全国放送教育研究会連盟役員、教員、教育行政関係者と、2016～17年度の「NHK for School」の制作方針および教育コンテンツの将来の在り方について検討を行った。

②学校放送番組委員会

各番組の企画・制作にあたって、学識経験者、教員、教育行政関係者などと意見交換を行い、学校現場の意向や要望を反映させた。

III. 趣味・実用番組

(1) 定時番組

料理番組については、長年多くのファンからの支持を受けている『きょうの料理』、主に初心者に向けて料理の基本を分かりやすく伝える『きょうの料理ビギナーズ』を月～木曜の午後9時台に放送した。15年度に引き続き月に1回『生放送月刊きょうの料理』を放送。Twitterで寄せられる質問に講師が答える演出で視聴者から好評を得ている。同じく固定ファンに支えられている園芸については、野菜作りの楽しさを伝える『趣味の園芸 やさいの時間』、花と緑を生かすライフスタイル提案のミニ番組『趣味の園芸グリーンスタイル』、本格的な園芸ファンのニーズにも応える『趣味の園芸』の3番組を、日曜朝8時台に放送した。

クラフト系の番組としては、手芸など手作りの楽しさを伝え、固定ファンから支持されている『すてきにハンドメイド』を木曜夜9時台に放

送。14年度から定時化した『ガールズクラフト』は、小・中学生向けに安価な素材でかわいい雑貨やアクセサリーを手作りするノウハウを紹介した。

趣味のジャンルを扱う『趣味どきっ!』は15年度から定時番組として月～水曜夜9時台に放送。「きょうから発酵ライフ」「私の朝活」など生活を豊かにする提案から、文化体験、スポーツ講座まで、現代社会の趣味の多様化に合わせて放送。番組・テキスト共に好評を博した。

月～木曜の夜間には、暮らしに役立つさまざまなノウハウをコンパクトに伝える5分ミニ番組『まる得マガジン』を放送した。

若者に身近な事象を経済学で分かりやすく読み解いていく『オイコノミア』は、5年目を迎え、存在感のある番組として定着。枠内特集なども積極的に放送し、視聴者層のすそ野を広げることに努めた。

同じく5年目を迎えた『団塊スタイル』は、ジャンルの幅を広げる一方で、高齢者の関心の高い健康的な暮らしをテーマにした番組を積極的に放送した。

(2) 特集番組

『バラのささやき～創られた美の物語』(10.15)は、わずか200年で3万以上もの品種に増えたバラの美にまつわる物語を4Kで収録。日本のノイバラを主役に、さまざまなバラのCGキャラクターの目線から、花の女王バラの歴史をひととくファンタジードキュメンタリー番組として放送した。映像の美しさで魅了した。

IV. 外国語講座番組

(1) 定時番組

Eテレでは20番組、ラジオ第2では25番組の合計45の定時番組を制作・放送した。

① Eテレ

20年開催の東京オリンピック・パラリンピックや訪日外国人の増大を背景に、世代を超えて高まる語学学習へのニーズに応える番組を放送した。英語では『エイエイGO!』シーズン2を制作。第1シーズンと同様、中学英語の基本である「語順」と「発音」をテーマに、日本人にありがちな間違いをピックアップし、間違いの原因を解き明かしながら「通じる英語」を目指した。そのほか、前期の『おとなの基礎英語』は、オーストラリアを舞台としたシーズン5を制作。後期制作の『しごとの基礎英語』は「反射」をテーマとしてシ

ズン4を制作。仕事で英語を使うシチュエーションの中で、10秒でどれだけ反射的に伝えたいことを英語で話せるかに挑戦する内容とした。また、『ニュースで英会話』は内容時間が5分拡大し25分になったことで、ニュースの背景解説を充実させ、時事的なトピックで「英語でどう話すか」だけではなく「何を話すべきか」に視聴者が意識を向けられるようにした。TED Talksを基に英語プレゼンテーションを学ぶ『スーパープレゼンテーション』は、2回の放送をそれぞれ日本語吹き替え、オリジナルの英語の2バージョンで放送し、英語に興味がない人も引き付ける取り組みをした。

そのほかの言語では、独・仏・中・西・伊・ハングル・露・アラビアの8言語を放送。欧州4言語は、後期から「旅するユーロ」シリーズに大きくリニューアルした。生徒役の出演者がスタジオでVTRを見ながら学ぶ演出から“旅人”として現地を旅しながら、ネーティブのパートナーの助けを借りつつ、旅先で実際に使うフレーズを体当たりで学ぶ演出にした。

また、『テレビで中国語』では、日本人が苦手とする“声調”を波形にして確認できるサイト・アプリの機能「声調確認くん」を番組でも連動して活用し、視聴者の学習をサポートした。

② ラジオ第2

英語講座では、中学生向けの『基礎英語』シリーズで、新たな講師陣を向かえ大幅リニューアルした。『基礎英語』1・2・3で毎月1つ、同じ「CAN-DO」を設定。「CAN-DO」とは“英語でできること”的意味で、シリーズ全体で、より長期的に、より体系的に学べるようにした。その他『ラジオ英会話』や『実践ビジネス英語』など、本格的に英会話に取り組みたい人、ビジネス現場で使う高度な英語表現を学びたい人など、さまざまなニーズとレベルに向けた講座を放送した。英語以外の外国語では、16年のリオ五輪開催に合わせて『ポルトガル語ステップアップ』を3年ぶりに新作『ポルトガル入門』と共に、1年間通年で放送した。そのほか、欧州各国語、中国語、ハングル、アラビア語など、きめ細かくレベルを分けて放送し、言語をより深く学びたいリスナーの要望に応えた。

デジタルサービスでは、既にリリースしていた英語・中国語の発音アプリを「NHKゴガクアプリ」としてバージョンアップ。ゴガクサイトと同じくラジオ番組のストリーミングが聴ける機能を備え、年度末には初回起動数が22万となった。

(2) 特集番組

Eテレでは、7月に外国人による日本語弁論大会『ワタシの見たニッポン2016』を放送。9月からは、小学3・4年生向けの英語開発番組『エイゴビート!』を放送。9月には、TV&ラジオ&アプリの“三位一体”英単語学習コンテンツ『ボキャブライダー ON TV』を開発特集として4週間にわたり、放送・リリースした。また、8~9月にかけて、BBC制作の『レイチェルのパリの小さなキッチン』の日本語吹き替え版を6回シリーズで制作し放送。料理研究家・ライターであるレイチェルが、手軽にできる「パリのおうちごはん」を魅力的に紹介した。

ラジオ第2では、15年度に引き続き、年末年始に『エンジョイ・シンプル・イングリッシュ』『ニュースで英会話』『ボキャブライダー』のスペシャル版を放送。また、『食べて！歌って！まるごとユーロ！』と題した、ヨーロッパ各国の食の話題と音楽についての特集を4日連続で放送、言葉の魅力も併せて楽しく紹介した。

V. 文化・福祉番組

文化・福祉番組部では、教養・生涯学習への多様な要望に応える文化番組、子ども・障害者・高齢者等の社会的弱者の課題に取り組む福祉番組など、多彩で高品質な番組を制作してきた。

16年度は、従来通りの教養および知的エンターテインメント番組に加えて、東日本大震災に関連した番組をもう一つの重要な柱として、引き続き番組の制作に当たった。福祉番組や宗教番組、『ETV特集』などで、東日本大震災や原発事故の深刻な影響、今も翻弄され苦しむ人々の姿を取材し、その後も続く避難の状況、復興に向けての試行錯誤について、文化・福祉番組部ならではの蓄積や経験を生かした番組を放送した。

(1) 定時番組

総合テレビでは『探検バクモン』が夜8時台に移り、視聴者に代わってふだんは入ることのできない現場を探検するスタイルを踏襲しながらも、より見やすく大幅リニューアルをした。探検先も「迎賓館赤坂離宮」など8時台にふさわしい場所を選んだ。時間を拡大したスペシャル版では、およそ2年間の取材と交渉を重ね「国立印刷局」へ世界に誇る「日本のお札の精緻さ」を伝えた。

Eテレの『ETV特集』では16年も、歴史や文化に新たな角度から光を当てながら、現代の課題に迫り、普遍的な人間の真実を見つめ直すドキュメ

ンタリー番組を編成した。例えば「エヴァの長い旅～娘に遺すホロコーストの記憶～」では、ホロコーストの歴史を再発見するにとどまらず、凄絶な戦争体験がいかにその後の人生に影響を及ぼすか、それ違う世代間の認識をどう埋めるか、現代の移民問題にどんなヒントを投げかけるか、などといったテーマを掘り下げた。また、例えば「原発に一番近い病院 ある老医師の2000日」では、原発事故で混迷する福島の医療現場の現実やそこで奮闘するひとりの老医師の生きざまを通して、医療とは何か、老いとは何か、といった人間の課題にまで透徹した内容を目指し、制作・放送した。

82年から続く『こころの時代』では、競争社会のストレスや深まる心の闇、また、東日本大震災などをきっかけに、問い合わせられる人生の意味や、人々が直面する困難を乗り越えるすべを、宗教関係者だけでなく多様な分野で活躍する人々への長時間インタビューを通して掘り下げた。また、16年度の半期シリーズとして「“ブッダ最後の旅”に学ぶ」を放送した。

また、夜10時台の『SWITCH インタビュー 達人達』『先人たちの底力 知恵泉』は4年目、同じく夜10時台の『100分de名著』は6年目を迎えた。

『SWITCH インタビュー 達人達』では、各界の第一線で活躍する“達人”同士が互いの現場を訪ね合い、仕事の極意や人生哲学を発見し合うトーク・ドキュメントを展開。「きゃりーぱみゅぱみゅ×山田孝之」「井上芳雄×高橋大輔」「渡辺謙×山中伸弥」「新海誠×川上未映子」等々、「この番組でしかありえない」異色の顔合わせを実現させ、注目を集めた。

『先人たちの底力 知恵泉』は、歴史上の人物の知恵を、現代の第一線で活躍するプロフェッショナル＝「仕事人」が読み解いていくという異色の歴史番組として開発された。先人たちが課題や困難を克服するときに發揮した知恵は、現代社会でも通用するのではないかという視点の下、歴史と現代の知恵の融合や共通項の抽出を試みた。40～60代を主な視聴者層と位置づけ、歴史番組にビジネス的な視点を取り入れることで、これまでの歴史ファンとは違う新たな視聴者層を開拓した。

『英雄たちの選択』では、日本の運命を決める岐路に立った英雄たちの心中に、歴史学、軍事学、経済学など、さまざまなジャンルの専門家と共に深く分け入り、新しいアプローチで日本の歴史を描いた。

『100分de名著』では、読みたいと思いながら

も踏み出せなかったり、途中で挫折してしまった古今東西の名著を分かりやすく解説することをコンセプトに「カント 永遠平和のために」「歎異抄」「宮本武蔵“五輪書”」「ガンディー“獄中からの手紙”」「宮沢賢治スペシャル」など、幅広く名著を解説。『100分de手塚治虫』など、スペシャル版も放送した。

福祉のジャンルでは『ハートネットTV』が6年目に突入。4月に熊本地震が発生すると、すぐに取材チームを派遣し生放送やインターネットで被災した障害者や高齢者について情報提供した。7月には、相模原市の障害者施設で殺傷事件が発生。障害のある命について、生放送や月ごとの特集などで取り上げ考え続けた。9月に開催されたリオパラリンピックでは事前にシリーズを組んで日本選手を紹介。その取材を大会期間中の放送にも展開し、大会を盛り上げた。毎週月曜の「ブレイクスルー」や生放送の「チエノバ」「ハート展」などイベント連動の番組、介護やリハビリをテーマにした番組も継続。フリー枠では「その名はギリヤーク尼ヶ崎 職業 大道芸人」「新宿歌舞伎町俳句一家 尻派」など個性的な番組が話題を呼んだ。

15年度から始まった『オトナヘノベル』も継続。10代にとって身近な恋愛や学校生活などをテーマに、ドラマやスタジオトークなど多彩な演出で伝えた。その他『みんなの手話』『ろうを生きる 難聴を生きる』『楽ラクワンポイント介護』『ワンポイント手話』、ラジオでは『視覚障害ナビ・ラジオ』『社会福祉セミナー』などの番組で、障害のある人たちに向け情報提供を行った。

さらに、美術のジャンルでは『日曜美術館』『美的壺』、紀行ジャンルでは『世界ふれあい街歩き』を放送。

芸能番組

I. ドラマ番組

16年度のドラマ番組は、連続ドラマ、単発・シリーズドラマそれぞれの特長を生かして質の高いドラマ制作を目指した。連続ドラマでは『大河ドラマ』『真田丸』、『連続テレビ小説』「とと姉ちゃん」「べっぴんさん」がいずれも好評を博したほか、『ドラマ10』は現代女性を描く枠として定着。大人向けの上質なエンターテインメントを目指した『土曜ドラマ』や『土曜時代劇』『BS時代劇』

『プレミアムドラマ』『プレミアムによるドラマ』は、斬新な企画で視聴者層の拡大に挑んだ。

(1) 連続ドラマ

①『大河ドラマ』

63年「花の生涯」から始まった『大河ドラマ』は、16年「真田丸」で55作目。作・三谷幸喜。主演・堺雅人。信濃の一領主に過ぎない真田家は、父・昌幸の天性の勘と武略を頼りに戦国をギリギリで生き抜いていた。その背中を見て成長した信幸と信繁。兄弟で殺し合うことが日常茶飯事の戦国時代、彼らは最後に豊臣、徳川と敵味方に分かれてもなお、家族を思う気持ちを決して忘れなかつた。中流というべき家柄の、好奇心たっぷりの次男坊は、いつしか徳川家康をも脅かす存在に…。不屈の名将・真田信繁の生涯を、ダイナミックに、時にユーモアたっぷりに描く（全50回）。

②『連続テレビ小説』

「朝ドラ」として定着。16年度前期「とと姉ちゃん」で94作目。作・西田征史、主演・高畑充希。静岡県・遠州に生まれ、亡き父に代わり母と妹たちを守る「とと（父親）姉ちゃん」と呼ばれて育つ小橋常子。戦前・戦後の激動の昭和をたくましく生き抜く三姉妹、家族の物語。また、彼女らが女性のための雑誌を作る出版社を立ち上げ、天才編集者・花山伊佐次と出会い、雑誌『あなたの暮らし』を刊行、一世を風靡する（全156回）。

後期・95作目は大阪局制作「べっぴんさん」。作・渡辺千穂、主演・芳根京子。戦後の焼け跡の中、娘のため、女性のために、子ども服作りにまい進し、日本中を元気に駆け抜けていくすみれとその家族。そして、彼女の仲間たちが夢へと向かう物語（全151回）。

③『木曜時代劇』から『土曜時代劇』へ

木曜夜8時。鼠小僧の活躍を描いた「鼠、江戸を疾る2」（8回）、10月からは土曜午後6時10分から『土曜時代劇』「忠臣蔵の恋～四十八人目の忠臣」（20回）が放送され時代劇ファンを魅了した。

(2) 単発・シリーズドラマ・オーディオドラマ

『土曜ドラマ』「トットてれび」（7回）は、昭和の復興期の芸能界を描き好評を得た。「夏目漱石の妻」（4回）、ウクライナで大ヒットしたドラマを日本でドラマ化した「スニッファー嗅覚捜査官」（7回）など、エッジの効いた企画が視聴者の興味を引いた。

また、金曜夜10時に『ドラマ10』は移設。「コントレール～罪と恋～」（8回）、「水族館ガール」（7回）、「運命に、似た恋」（8回）、「コピーフ

ェイス」（6回）、「お母さん、娘をやめていいですか？」（8回）、30～50代女性に向け、サスペンスを交えた恋や母娘の葛藤など斬新な企画に挑戦した。

BSプレミアムの日曜午後10時『プレミアムドラマ』では、「嫌な女」（6回のうち4回は15年度）、「奇跡の人」（8回）、「受験のシンデレラ」（8回）、「隠れ菊」（8回）、「山女日記」（7回）、「女の中にいる他人」（7回）、総合テレビとの連動企画「スリル！～黒の章～」（4回）を放送した。『プレミアムによるドラマ』は火曜午後11時15分から「初恋芸人」（8回のうち4回は15年度）、「最後のレストラン」（8回）、「ふれなばおちん」（8回）、「ママゴト」（8回）、「プリンセスマゾン」（8回）、「幕末グルメ ブシメシ！」（8回）、「嘘なんてひとつもないの」（4回）と、バラエティーに富んだ7シリーズを放送した。

金曜午後8時の『BS時代劇』では、「立花登青春手控え」（8回）、「伝七捕物帳」（9回）、「子連れ信兵衛2」（7回）、「雲霧仁左衛門3」（8回）を放送、時代劇ファンの期待に応えた。

特集ドラマでは、『放送90年大河ファンタジー精霊の守り人』（4回のうち3回は15年度）、その続編「精霊の守り人Ⅱ 悲しき破壊神」（9回）、「最後の贈り物」「喧噪の町、静かな海」「百合子さんの絵本」「スクラップ・アンド・ビルド」、プレミアムドラマとの連動企画「スリル！～赤の章～」（4回）、「空想大河ドラマ 小田信夫」（4回）、「絆」（2回）、「正月時代劇 陽炎の辻 完結編」、「新春スペシャルドラマ 富士ファミリー2017」、「戦艦武藏」「獄門島」「漱石悶々」「大岡越前スペシャル」「花嵐の剣士」、「創作テレビドラマ大賞」「あなたにドロップキックを」などの意欲的なドラマを制作した。

オーディオドラマは定時番組『FMシアター』『青春アドベンチャー』『新日曜名作座』のほか、『特集オーディオドラマ』を放送。また、良質の舞台演劇を中継する番組『プレミアムステージ』では演劇ファンの要望に応えた。

II. エンターテインメント番組

エンターテインメント番組部では、主に音楽（歌謡曲・ポップス）やバラエティー・芸能のジャンルで、幅広い層の視聴者に親しんでもらう娛樂番組を制作した。16年度は、新番組として『うたコン』『歌う！SHOW学校』『バナナ♪ゼロミュージック』をスタート。総合テレビ・午後7時

時台では、月曜に『鶴瓶の家族に乾杯』、火曜に『うたコン』、土曜に『プラタモリ』という3つの番組を制作した。また、特集番組も『NHK紅白歌合戦』『思い出のメロディー』など大型音楽番組をはじめ、質の高いエンターテインメントを制作した。

(1) 定時番組

音楽番組は『うたコン』『SONGS』『新・BS日本のうた』『ザ少年俱楽部』『AKB48SHOW』など、幅広い世代に向けて多彩な音楽ジャンルを取り上げた。

バラエティーでは『鶴瓶の家族に乾杯』『プラタモリ』のほか、コント番組『LIFE!～人生に捧げるコント～』、そして『○○○○の演芸図鑑』

『日本の話芸』などの演芸番組を制作。音楽バラエティー『バナナトリゼロミュージック』も新たにスタートした。

また、当部の業務の中核をなすジャンルの1つとして“公開派遣番組”がある。地域の会館などで公開の形で制作される番組は、視聴者とNHKを結び付ける役割を担っており、16年度も『NHKのど自慢』(年間46回)をはじめ『歌う!SHOW学校』(年間13回)、『真打ち競演』(15回)、『キャンパス寄席』(5回)、特集番組として、チャリティイベント『歌謡チャリティーコンサート』(2回)、震災プロジェクトの一環として制作した『明日へつなげるライブ』(3回)など、数多く制作した。

また、Eテレでは、知的エンターテインメント番組として『Eダンスアカデミー』『ミュージック・ポートレイト』を制作。

ラジオ番組は、アイドル、J-POP、洋楽、演歌、歌謡曲といった幅広いジャンルの音楽番組、『日曜喫茶室』『トーキング ウィズ 松尾堂』といったトーク番組、演芸や浪曲番組など、ラジオの特性を生かした音楽以外のジャンルの番組なども制作。多様なラジオリスナーのニーズに応えるとともにNHKへの接触者率の向上を図り、ラジオの存在感を示した。

(2) 特集番組

16年度は、定番の大型歌謡イベントや、定時番組を発展させた特集、視聴者層の拡大を狙った開発番組など、年間でおよそ150本を制作した。

大みそか恒例『NHK紅白歌合戦』、第67回となる16年度は“夢を歌おう”というテーマのもと、NHKホールから生放送で届けた。毎年8月に放送している大型歌謡イベント『思い出のメロディー』も、今回で第48回を数えた。

Eテレ『浦沢直樹の漫勉』、BSプレミアム『六角精児の呑み鉄本線・日本旅』など、漫画や鉄道といった多彩なジャンルの特集番組も、固定ファンを得ている。

また、明石家さんまが31年ぶりにNHKへ本格出演となった『第1回明石家紅白!』、誕生から30年となる人気ゲームの魅力を探った『ドラゴンクエスト30th』、ONE OK ROCK初の地上波出演となった『ONE OK ROCK 18祭』などの特集番組も、大きな話題を呼んだ。

定時番組を発展させた特集としては『NHKのど自慢チャンピオン大会2017』『SONGSスペシャル』『鶴瓶の家族に乾杯 海外スペシャル』『プラタモリ×鶴瓶の家族に乾杯 初詣スペシャル』など数多く制作。

そして16年度は、若者向けの音楽番組として『シブヤノオト』『NAOMIの部屋』を開発。10~20代に支持されているバンドやアーティストを、生放送で紹介した。

III. 音楽・伝統芸能番組

音楽・伝統芸能番組部では、クラシック音楽、日本の伝統芸能、民謡、ポップスなど幅広いジャンルで、視聴者の期待に応える良質な番組コンテンツを制作し、公共放送として日本の放送文化における重要な役割を担った。

(1) テレビ定時番組

『にっぽんの芸能』は、司会を女優の石田ひかりと秋鹿真人アナウンサーにリニューアルし、より親しみやすい内容を心がけた。「名人列伝」のコーナーは「新・名人列伝」としてより長くアーカイブス資料を鑑賞できる構成としたほか、各界の著名人が和の伝統との関わりを語る「私と和」や旬の情報を紹介する「旬の和題みみより」コーナーも新設し初心者でも入りやすい内容とした。

不定期放送だった『古典芸能への招待』は13年度から定時化し、16年度は年間11本放送。能狂言・文楽・歌舞伎を2時間じっくり楽しめる内容で視聴者の期待に応えた。

『クラシック音楽館』は、NHK交響楽団の定期演奏会を中心に、国内外のオーケストラによる注目の演奏会をノーカットでたっぷりと楽しんでもらう大型の音楽芸術鑑賞番組。クラシック音楽の魅力を存分に伝えた。

『ムジカ・ピッコリーノ』は「子どもの感性を刺激する」小学校低学年向け音楽教育番組。毎回クラシック、ポップス、民族音楽などあらゆるジ

ヤンルの名曲を取り上げながら、15年度に引き続き、楽器を紹介することを主眼にした内容で、親子で楽しめるシリーズを展開した。

『ららら♪クラシック』は「どこかで聴いたことのあるクラシックをあなたのものに！」をキヤッヂフレーズに、初心者にも分かりやすい多彩な切り口でクラシック音楽の魅力を紹介した。

このほか『クラシック俱楽部』で、第一線で活躍するアーティストによる室内楽の演奏を放送。2月には番組初となる4K収録を行った。『プレミアムシアター』では、世界のクラシック音楽公演を、国際共同制作・独自収録・番組購入など、バラエティー豊かなラインナップで放送した。

(2) 公開派遣番組

『民謡魂 ふるさとの唄』を全国9か所で公開収録し、民謡や郷土芸能を通じて“その地域ならでは”的「ふるさと」の魅力を伝えた。

ラジオでは『民謡をたずねて』14か所、『ベストオブクラシック』4か所、『吹奏楽のひびき』2か所、『リサイタル・ノヴァ』2か所、『きらクラ！』2か所、『ららら♪クラシック』『ブラボー！オーケストラ』1か所で地方公開収録を実施した。

(3) ミニ番組

『名曲アルバム』では、世界の名曲を、その曲ゆかりの地の文化や歴史、風土などの映像と共に紹介。日本の名曲も地域放送局参加で制作。また、放送開始40周年を記念した特番も放送し、存在感をアピールした。

(4) テレビ特集番組

『魂に響くピアノを 中村絃子さんの残したもの』(8.7)では、日本を代表するピアニストを追悼。多方面にわたる業績を振り返りながら、ショパンやチャイコフスキーの名演をお送りした。

『世界でカブけ！ラスベガス歌舞伎』「獅子王 SHI-SHI-O」(8.15)はラスベガスにおける初の本格的な歌舞伎公演のもうを4Kで中継収録した。宙乗り、早変わりなど歌舞伎の様式美盛りだくさんの内容は海外でも高く評価された。

『ももクロ和楽器レボリューションZ』(11.3)では、和楽器とロック・ポップスをコラボレーション。ももクロをMCに起用し、幅広い世代に伝統芸能の魅力を分かりやすく伝え、新たな視聴者層を獲得した。

『シンフォニック・ゲーマーズ～僕らを駆り立てる冒險の調べ～』(11.6)は、ゲーム音楽の名曲を管弦楽版にアレンジし、ゲーム専門オーケストラによる迫力の演奏で届ける番組。20～30代の若者世代から絶大な支持を得た。

『第43回NHK古典芸能鑑賞会』(12.17)は、NHKならではの豪華な顔合わせと、類を見ないバリエーション豊かな演目が見どころ。一夜でさまざまなジャンルの芸能の至芸を紹介した。

元日恒例の『ウィーン・フィル ニューイヤー・コンサート2017』では、ハイビジョン5.1chサラウンドの高画質・高音質で、オーストリア・ウィーンからの生中継を行った。また、今回も初めてウィーン楽友協会内に特設中継会場を設け、ウィーン・フィルの元コンサートマスター、ライナー・キュッヒルと音楽評論家・奥田佳道が現地よりTV生中継を行った。

正月2日に恒例となった『こいつあ春から～初芝居生中継～』は、歌舞伎座と大阪松竹座を結び初芝居の魅力をお茶の間に伝えたほか、18年1月に襲名が発表された松本幸四郎・市川染五郎親子の終演後の楽屋で襲名への思いを生放送で伺った。松本金太郎丈もロケインタビューで出演し、親子そろっての出演がかなった。

正月3日恒例の『NHKニューイヤーオペラコンサート』は、節目となる第60回を迎えた。「泣いて笑って歌って 人生はオペラだ！」をテーマに、日本を代表するオペラ歌手たちの熱唱をNHKホールから2時間生放送した。

そのほか『クラシック・ハイライト2016』(12.31)、『初春 世界を魅了！伝統芸能のパイオニアたち』(1.1)などを制作し、16年度の古典芸能・クラシック音楽などの重要なトピックを取り上げて放送した。

(5) FM特集番組

『今日は一日“○○”三昧』は、テーマを1つのジャンルに絞って一日中たっぷり放送する超長時間特集番組。16年度は「アニソン三昧～あんな歌にそな歌にこんな歌 何ンでもありーな感じ！？～」「JB（ジェームズ・ブラウン）&ファンク”三昧」「“ブラジルまるかじり”三昧」「“デヴィッド・ボウイ”三昧」を放送した。

14回目を迎えた秋の恒例イベント『NHK音楽祭』は“偉大なる芸術家たちへ”をテーマに開催。オープニング・コンサートや4つのオーケストラ公演をNHKホールから生放送した。

ほかに、5月の大型連休に有楽町で開催される音楽祭を長時間生放送した『まるっと“ラ・フォル・ジュルネ”』や『おんがくのつぼ』『オトナのための“子ども音楽”入門』『吉田秀和が語ったブームズ』『ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 来日公演』『徳光和夫のふるさと民謡トーク』『ヨーロッパ夏の音楽祭』『バイロイト音楽